

被災地の 子どももと大学生

「活動して思ったことを語り合おう！」



佐藤 弘悠 画

パンフレット

11月12日(土) 13:00~18:00(開場12:30)

宮城教育大学 2号館220教室

目 次

No	大学名	タイトル	氏 名	頁
1	北海道教育大学	福島県相馬市立中村第二中学校での学習支援ボランティアを終えて	伊藤 悟士	2
2	北海道教育大学	私たちにできること	佐藤 真美	4
3	愛知教育大学	立ち直ろうとする力～宮城・玉浦中学校での生活を通じて～	富田 祥弘	6
4	大阪教育大学	日本中が1つに	上田 瑞歩、胡本 義宏	8
5	京都教育大学	私は福島を、宮城を、岩手を元気にしたい！	渡辺 玲	10
6	京都教育大学	ボランティアを通して	網田 洋志	12
7	奈良教育大学	宮城教育大学との連携による活動を通して	木下 智彰、朝田 真琴	14
8	福岡教育大学	被災地から学んだ事	畑 勇気	16
9	福岡教育大学	「良い経験」で終わらせない	與田 くらら	18
10	群馬大学	「復興支援塾in女川町」に参加して	登川 希香	20
11	滋賀大学	子どもたちに寄り添うということ	入山 久美子	22
12	仙台大学	「まなびや」学習支援ボランティア活動報告	星 隼斗、山崎 えりな	24
13	東北大学	大学間の継続的な連携に向けて—東北大学生の経験から—	本山 敬祐、佐々木 耕太、川上 葉	26
14	東北福祉大学	子ども達とのかかわりの中で	三本杉 由香	28
15	宮城教育大学	ボランティア活動から学んだこと	遠藤 しおり	30
16	宮城教育大学	中野小学校ボランティアを通して	高木 詩織	32
17	宮城教育大学	生徒たちのために学生ボランティアができること	佐藤 梨奈	34
18	宮城教育大学	NPOアスイク 石巻支部での活動を通して	味水 佳織	36
19	宮城教育大学	ユネスコによる被災児童に対する支援活動	鈴木 耕平	38
20	宮城教育大学	ボランティア活動の意義	安齋 裕美	40
21	宮城教育大学	私にできること	井上 久李	42
22	宮城教育大学	伊里前小学校のボランティアを通して	横田 希子	44
23	宮城教育大学	初めてのボランティア	熊谷 真帆	46
24	宮城教育大学	松山小学校へのサマースクール支援	戸澤 香奈	48
25	宮城教育大学	学府くりはら塾に参加して	後藤 恭	50
26	宮城教育大学	未来を担う子どもたちとの出会い	高橋 周太	52
27	宮城教育大学	ボランティアは自己成長に繋げられる	高橋 遼	54
28	宮城教育大学	素直な子供たち	黒澤 千洗	56
29	宮城教育大学	輝く笑顔	佐々木 久枝	58
30	宮城教育大学	中野小学校学習支援ボランティア活動報告書	佐藤 愛里	60
31	宮城教育大学	海を見て	佐藤 美理	62
32	宮城教育大学	学校支援ボランティアを通して	佐藤 佑一	64
33	宮城教育大学	ボランティア活動を通して	三瓶 真実子	66
34	宮城教育大学	震災ボランティアを通して	山科 友理恵	68
35	宮城教育大学	古川東中学校ボランティア活動報告書	菅原 朱莉	70
36	宮城教育大学	ボランティア活動(炊き出し・学習支援)を振り返って	星 知美	72
37	宮城教育大学	進め！中野小学校	星 尚仁	74
38	宮城教育大学	学習支援ボランティアのまとめ	石郷岡 千晶	76
39	宮城教育大学	中野小学校学習支援ボランティア活動報告書	中村 沙也香	78
40	宮城教育大学	閑上中学校でのボランティア	渡邊 佳純	80
41	宮城教育大学	中野小学校でのボランティア活動を通して学んだこと	藤田 美穂	82
42	宮城教育大学	被災学校支援ボランティアを通して	畠山 結衣	84
43	宮城教育大学	助け手として	福士 亮	86
44	宮城教育大学	荒浜小学校の震災復興ボランティアに参加して	峯田 清人	88
45	宮城教育大学	中野小学校でのボランティア活動報告	巖岸 香菜	90
46	宮城教育大学	中野小に行って	鈴木 将也	92

資料

1	宮城教育大学	教員養成大学としての教育復興支援	芳賀 茂	96
2	仙台市立中野小学校	学生ボランティア活用計画		100
3	宮城教育大学	教育復興支援ボランティア活動について 仙台市立中野小学校	木田 武宏、丹野 大輝	101
4	宮城教育大学	石巻支援学校での支援活動	藤原 結香、櫻田 翔子	102

ボランティア活動報告書

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

タイトル 「福島県相馬市立中村第二中学校での学習支援ボランティアを終えて」

大学名 北海道教育大学旭川校 **学年** 4
氏名 伊藤 悟士

【動機】

3月11日、滅多に地震の無い旭川で揺れを感じ、震源を確認するため点けたテレビの前で、津波が街を飲み込む映像を見て、同じ日本で起こっている事実なのかと衝撃を受けたのは記憶に新しいです。そして、その事実に対し、なにもすることができない自分の無力さに歯痒い思いをしたことも多々ありました。そんな時、大学の通知で震災復興支援ボランティアに参加の機会があることを知ったのです。

学習支援ボランティアは、瓦礫撤去などといった形有るものではありませんが、長い目でみて、東北や日本、世界で活躍する人材を育てるために必要なことだと思いました。そして近い将来、教育に携わる身としてこの上ない機会だと思い、参加を決意しました。

【活動概要】

- ・福島県相馬市立中村第二中学校における、学力向上のための補習（教員補助及び自学自習支援）
- ・中村第二中学校校長より、福島県や相馬市、学校における被災状況を説明していただく。
- ・9月26日(月)～30日(金)まで、「がんばりタイム」と放課後の自学自習の計50分間、個別指導を行う。

【活動して思ったこと】



被服室天井が割れている様子

まず、左にある写真のように校舎が壊れ、授業ができない状況だったり、同級生が亡くなってしまった生徒もおり、学校で勉強に取り組める、友達に会うことができるといった、私たちが当たり前に行うことができると思っていることが、震災によって困難になっていることを知り、非常に心苦しく思いました。

次に、生徒との信頼関係の構築についてですが、限られた支援活動の時間の中でこれを完璧にこなすということは難しいです。ある生徒が「先生方(学生ボランティア)、居る意味ないよね。」と言ったので、なぜかを問うたところ、「(どんな人物か)気になって勉強に集中できない。」とのことでした。自分たちが良かれと思ってやっていることでも、そうではないことがあるということに気づけました。

【今後、どう活かしていくか】

上記にあるように「私たちが当たり前に行うことができていること」について、日常を一瞬で非日常に変えてしまう天災の恐さに対し、今まで無関心であったことに危機感を覚えました。天災は忘れた頃にやってくるのではなく、忘れるからやってくるということを肝に銘じ、教員となった際には、日頃からの防災教育を徹底し、意識を高めておく必要があると感じました。

また、児童生徒との信頼関係の構築について、普段からよく観察し、積極的に関わっていくことが生徒理解へつながることを実感しました。ですので、児童生徒一人ひとりに情熱を持って指導し、学習面・生活面両方の良い点、つまずきを知り、最善の指導をすることで自ずと信頼関係は構築されると考えました。

最後に活動全体を通して感じたことが、連携の大切さです。毎日クラスやボランティアメンバーが替わる中で、生徒の実態を知ること、学習の進捗状況を把握することは重要だと感じました。私が教員となった際には、教員間・家庭・地域との連携を密にして、社会全体で児童生徒へ教育していきたいと思っています。

【その他：自由記述欄】



松川浦の被災状況を見学



福島県相馬市立中村第二中学校

【まとめ】

今回、震災復興支援ボランティアに参加したことで、媒体を介することなく自分の目で被災地、学校の現状を見ることができました。この貴重な経験で得たものは、必ず今後の糧となると確信しています。これらの経験を今後も生かしていけるように日々努力したいと強く思いました。

最後になりますが、宮城教育大学 復興支援塾 研究・連携推進課及び北海道教育大学、ボランティア受け入れ先の教職員の皆様には、貴重なボランティアの機会を与えてくださったことを感謝しております。被災地域のいち早い復興を心よりお祈り申し上げます。

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

「タイトル 私たちにできること」

大学名 北海道教育大学釧路校 学年 3
氏名 佐藤 真美

【動機】

今回、ボランティアの活動校となった福島県相馬市中村第二中学校は、私の母校でした。震災以来、一度も帰省できておらず、はやく自分の目で現状が見たい、地元のために何かしたい、という思いから、ボランティアに参加しました。

【活動概要】

9/26～30 一週間

15:35～16:00 がんばりタイム プリント学習のサポート（国・社・英）

16:05～16:30 個別指導

【活動して思ったこと】

- ・ 国語は古文読解だったので、話しかけて良いタイミングがわからなかった。
- ・ 文系教科だけだったので、教えるのが難しかった。
- ・ あらかじめ、生徒が勉強しているところ（授業内容、英検など）を知っておくと対応しやすい。
- ・ 生徒も私たちも、初めは互いに緊張して、生徒からの質問が少なかった。初日は、個別指導に残ったのがクラスの中で3人しかいなかった。
- ・ 学校の雰囲気や生徒たちの様子からは、被災地という印象がなかった。しかし教室のうしろの掲示板では「笑顔をふやす」などの目標が多くあり、少し身構えてしまった。

【今後、どう活かしていくか】

- ・ 理系科目を取り入れてもらえると、短時間の中で教えやすい。
- ・ 交流の場を用いると良いのではないか。

いきなり教えようとするよりも、給食の時間や休み時間など、教室にいさせてもらえると、お互い打ちとけられると思うし、勉強以外の交流は大切だと思う。

【その他：自由記述欄】

私はボランティアがあったおかげで実家に帰れました。家族からはずっと「こっちは大丈夫だから来るな」と言われていたのですが、実際帰ってみると、とても悲惨な状態でした。私に心配かけないように嘘をついていた家族の優しさに、とても胸が痛みました。

震災は、たくさんの被害をもたらしましたが、あたたかい話もたくさんあります。悲しい話だけでなく、感動する話を多く出し、人の優しさや頑張りを胸にみんなに前向きになってもらいたいです。

【まとめ】

ボランティアを通して地元を訪れたことで、現実を受け入れることができました。また、関係ないのにわざわざ母校まで行ってくれた他の参加者の熱い思いから、自分が他の地域のことまで目を向けられていないことに気づき、反省しました。

今回は中学校でしたが、専門である小学校だったらどんなボランティアができるか、考えていきたいです。原発で、再開できなかつたり、学校自体が流されてしまったところなど、大変なところはまだまだたくさんあるので、もし自分が力になれることがあれば協力していきたいです。

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

「立ち直ろうとする力～宮城・玉浦中学校での生活を通じて～」

大学名：愛知教育大学大学院 学年：M2

氏名：富田 祥弘

【動機】

日本は今年、163の国・地域及び43もの国際機関から支援の申し入れを頂いた。中には、所得水準で比較すれば日本の何十分の一、あるいは百分の一という貧しい国々からも、支援が寄せられた。そんな彼らが「支援する」ということは、自分の食べる分を削って、人のために提供することを意味する。2011年3月11日の震災の日以来、世界中の方々が日本を応援してくれているのだ。そんな時だからこそ、自分だって「何かしたい」と思い、ボランティアへの参加を決意した。

【活動概要】

場所：岩沼市立玉浦中学校

期間：2011年9月5日（月）～9日（金）の5日間

内容：教員補助（授業間での学習支援）

被災した宮城県内の小・中学校での授業間及び放課後の児童生徒の相手、課外活動支援、教育環境整備等を実施。

具体的には数学を中心に、授業における指導、及び部活動（主に卓球部）への参加を行った。

【活動して思ったこと】

印象に残ったことは、人間の、「日常へと立ち直ろうとする力」である。正直な話、被災者というキーワードと並行して、落ち込み・暗いという言葉が思い浮かべていたが、そこには笑顔の溢れる、いつもの日常と変わらぬであろう学校生活があった。ボランティア使命感でガチガチな、堅苦しい雰囲気想像していたが、予想に反して大変和やかで温かい雰囲気の中で迎えられ、ヘンな緊張もせず参加することができたのである。

現地を案内して頂いた際に、瓦礫の山を見てきた。そこには様々な生活感を感じさせるものがたくさんあり、現地の人々も、「失ったものがたくさんある」とおっしゃっていたように、失ったものによって本当にどん底まで落ちてしまったことは想像が容易なことだと思われる。そんな中で我々を迎えた際に、現地の人々が笑顔で集まり、励ましあっていた姿は、これこそが言葉では言い表せないし、テレビの画像では伝えられない「人間の立ち直る姿」というものを強く感じた。

【今後、どう活かしていくか】

あの惨劇を「ニュースの中の出来事」にして、埋没させてしまわない為にも、できることを少しずつ続けたいと思う。まずはこれから、自分の周りの人々に、自分の目で見た現地の状況を伝えていきたい。

また、この未曾有の事態に娯楽だなんて、との批判もあると思われるが、それでも日本の演劇者のひとりとして、再び舞台をやろうと考えることにした。劇場があって、舞台作品が上演されて、お客様が来て、みんなで楽しんでいる。被災していない者が疑似被災することなく、このあるべき姿を貫くことが、「普通の日常」へと立ち直っていくことだと思ったからである。だから私は今まで通り、一切の妥協を許さず全力で舞台をやる。毎日のように繰り返されてきた日常の大きさというものを伝えていきたい。

【その他：自由記述欄】

・阪神淡路大震災の教訓として、震災がおき、少し落ち着いた時に、子ども達は無気力状態になることが多かった。不安や恐怖の気持ちをどれくらい強く感じるかは人それぞれだが、子どもは、大人よりも状況がよく理解できないことが多く、何が起きているのか、今どうしたらよいのか、これからどうなるのかがわからない。そのため、見た目以上に大きな不安を感じていることも少なくないよう。そのため、近くにいて、声をかけてあげること、ひとりぼっちにさせないこと、目の前の子どもと関わるということが大切になってくるという。だからこそ、この時期の支援は助かるとおっしゃって頂けた。

今までこの中学校の生徒たちは、震災を実際に経験した方々ばかりと接している。が、これからは震災にあっていない人々とも出会っていくことになる。また、「支援してくれるんだ」という安心感を与えていくこともできる。そのため、積極的に生徒たちに関わっていくようにした。

・日本は今年、世界最大の被援助国になる。ODA 拠出額 5 位の日本に、途上国が支援の手を差し伸べてくれた。「国際協力はお互いさま」という価値観が日本社会に広がっていくことを願いたい。東日本大震災をきっかけにして、少しでも寄付文化が日本に根付き、日本国内だけでなく途上国にも再び恩返しをしていくことが、これからの国際社会への姿勢としても大切になってくると感じた。

【まとめ】

東日本大震災の発生から半年以上が経ち、少しずつ復興が進む中、報道・ボランティアの減少など、世間の関心の薄れ・風化現象も生じてきている感じが否めない。被災地の方々に『忘れられてきている』という気持ちを抱かせることのないよう、『被災者の為に何かしたい』と思っている方への体制を、今後の被災地の状況の変化に合わせて整える必要性を強く感じている。

また、私たち日本人は、頂いた愛をこれから循環させて行く事が必要になってくると思う。点で終わらせるのではなく、線でつなげていくことに意味があるはずである。私は卒業後、青年海外協力隊への参加を決意した。途上国への恩返しをするためにも。そして、自分が将来的に教員となったときに、今回のような経験をもとに活動するためにも、である。生徒たちに世界情勢やボランティアに興味・関心をもってもらえるよう、教育現場へと活動を還元していくことで、将来のボランティア人材の裾野も広げていけるようにしていきたい。

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

「タイトル 日本中が1つに」

大学名 大阪教育大学 学年 2年生
氏名 上田 瑞歩 胡本 義宏

【動機】

大阪にいながらも非常に大きな揺れを感じ、テレビをつけるととても衝撃的な映像が流れており、その時のことが頭から離れなかった。阪神淡路大震災を身近で体験したことから、メディアの情報ばかりではなく、自分自身の目で現状を知りたいと感じ、また学習支援ということで、将来教員を志望している私たちでも力になれるのではないかと思ったことが、今回参加させていただいた動機である。

【活動概要】

午前中はそれぞれ派遣された学校へ行き、主に質問対応という形で学習支援をおこなった。気仙沼市内の高校に派遣された学生は、就職・進学と目標の異なる生徒たち個々に対応し、それぞれに必要な勉強のサポートをしていた。

【活動して思ったこと】

宮城県の生徒たちは、非常に落ち着きがあり集中力もあった。実際に活動する前までは、どんな雰囲気の中での活動になるのか、また私たちが活動することで複雑な気持ちになる生徒もいるのではないかと、という不安が多々あった。しかし、実際に活動してみると最初はやはり少し壁はあったものの、次第に心を開いて質問してくれたり話しかけてくれたりする生徒が増え、明るい雰囲気の中で勉強に取り組めたように思う。想像していたよりも復興は進んでいたが、地域によって様子も異なり、私たちに何が出来るのかをより深く考えることとなった。活動から得たものは非常に多く、たくさん学ばせてもらったが、果たして活動がどれくらいの方々のお役に立てたのだろうかと考え、その点は分からない。私たちと関わることで少しでも多くの方々笑顔になっていただけたのなら、お互いにとってとても意味のある数日間になったと思う。

【今後、どう活かしていくか】

5日間のみ活動ということで、生徒たちとどのような関係を短期間で築いていけるだろうかと思っていたが、想像していた以上に良い関係を築けたように感じる。もちろんそのために、1人1人の学習の進み具合に気を配るだけではなく、積極的な声かけを行った。生徒たちと良い関係を築いていくことに期間という点はあまり問題ではなく、生徒たちを知ろうとする私たちの努力が必要だと感じた。こういった経験から、将来教員になった際にも生徒のことを知る努力は惜しまないように努めたい。また、自分自身の目で現状を知りたいということでこのボランティアに参加させていただいたが、1回参加しただけでは全てを知り尽くすことはできないので、継続的に活動していくことが必要だと感じた。そして、部活動に必要な場所や道具などを失った現地の生徒たちが活発に活動しているのを見て、失ったことを嘆くばかりではなく、今ある環境の中で出来る最大限のことをしようという姿勢を学ばせてもらった。今回の活動で学んだことは、私たちだけではなくより多くの人と共有できるよう、様々な方法で呼びかけていきたい。

【その他：自由記述欄】

9月に1週間だけ小学校に実習に行かせてもらった際に、担当の先生から機会をいただいたので小学4年生の児童約35人に今回のボランティア活動について話させてもらった。彼らの東日本大震災への関心はとても高く、自分たちにできることを個々に考え努力していた。実際に現地に行くことのできない児童たちに、私が行って見たこと・聞いたこと・感じたことを伝えることでもっと力になれることが増えるのかもしれないと感じた。これは、将来教員を志望する私たちだからこそ出来ることだと思うので、これからも機会があればどんどん発信していきたいし、微力ながらも日本全体が1つになる手助けをしていきたいと思う。

【まとめ】

たった5日間とはいえ、宮城教育大学の方々や派遣先の学校の方々、また他大学の学生たちとの出会いは私たちにとってかけがえのないものとなった。私たちが現地の方々の力になり、笑顔にできればと思っていたが、反対に私たちのほうがたくさん元気をもらい、たくさん学ばせてもらったように感じる。遠くに住む私たちが出来ることは、今回の活動で得られた経験を多くの人に知ってもらい、大阪と宮城を繋ぐ架け橋になることだと思う。活動する前はどんなことが誰かの力になるのか分からず、不安が大きかったが、3ヶ月経った今では忘れられない経験となっている。私たちが16年前に阪神淡路大震災で経験したことや今回のボランティアで学んだことを生かすためには、この1回の活動だけで終わらせてはいけないので、継続的にこういった活動に参加し、少しでも現地の方々の力になりたいと考えている。

【タイトル】：『私は福島を、宮城を、岩手を元気にしたい！』

【大学名・学年】：京都教育大学・1回生

【名前】：渡辺 玲(ワタナベ レイ)

【動機】

自分自身も福島の実家で被災して大変に怖い思いをした。

しかし、進学先が京都であったため、震災についてあまり深く語る機会もなく、どこか心の 中がもやもやしている部分があった。

ボランティアで宮城に行ったら、震災時に困ったことや怖かったこと、そして震災を経験したうえでの東北のこれからの教育問題を同世代同士気兼ねなく語り合うことができ、自分の心のもやもやを晴らすことができるのではないかと考えたから。

【活動概要】

活動を行ったのは七ヶ浜町立向洋中学校で期間は1週間。

主に三学年の国数英の授業の補助に回るとのことであったが、実際はすべての学年でほぼすべての授業の補助に回った。

【活動して思ったこと】

率直な感想として、三年生の特に英語の学力の低さに驚いた。

習ったばかりの文法はかろうじて使うことができる生徒が大半であったが、1年生や2年生 のうちに習うような簡単な単語を訳すことができない生徒が非常に多かった。

遅れを取り戻そうとしているからなのか、授業を見ている先生が単語や教科書の全文をそっくりそのまま黒板に書き、サラッと先生が訳して生徒はただ先生の板書を丸写しするだけで、それで英語の力が身につくのだろうかという疑問に思った。

生徒の様子は落ち着いて普段通りの生活を送っているように見えたのだが、授業中に地震の揺れを感じると、ものすごくおびえた目をする生徒がいたり、「次また津波が来たらさえぎるものないから、俺んち終わるかも。」と津波を不安に思う生徒がいたりしたのが気になった。

【今後、どう生かしていくか】

生徒に負担をかけさせないためとは言っても、やはりある程度の予習をさせることは必要だと感じた。

しかし、みんながみんな自分の力できちんとした予習ができるとは限らないということが実際の公立中学校の様子を見てよくわかったので、授業補助のほかにも、予習や復習の補助も必要なのではないのだろうか。(たとえば、放課後などに学生がボランティアで先生の代わりに勉強を教えに行くなど。)

また、普段は普通にふるまっているように見えても、ふいに地震や津波の恐怖

がよみがえることもあったことから、地震や津波などの怖いことを怖いと言うことは恥ずかしいことではないということを生徒に伝え、いつでも友達同士や先生、スクールカウンセラーと悩みを語り合えるようなコミュニティーづくりが必要だと思った。

【まとめ】

さまざまな専門家が口々に「想定外だった」と語る大震災。被害にあわれた方々の支援問題や地域の復旧復興問題を解決するために手探りの状況が続いている。

それは教育現場に関しても同じ。

私たちにとってまだまだこの震災は終わったものではないのだから長い目で被災地の教育問題に向き合っていかなければならないと思う。

地震大国日本。

またいつかこのような震災が起こるだろう。

その時にこのような取り組みが生かされれば、と思う。

今回は、ボランティア活動自体が初めての経験であったのに加え、自分自身の知識の少なさゆえに戸惑うことも多かったのだが、機会があればぜひまた活動に参加して私の地元・福島をはじめとする東北の未来を考えていきたい。

【タイトル】：『ボランティアを通して』

【大学名・学年】：京都教育大学・1回生

【名前】：網田 洋志(アミタ ヒロシ)

【動機】

3月11日に東日本大震災が発生しました。

発生直後、私は京都にいましたが、ニュースでは地震による一連の被害が報じられ、それを見ていたので、実際に被災したかのような恐怖と不安が体中を襲いました。

また、友達が後期受験のために東京方面に行っていたこともあり、わが身に起こった出来事として感じました。段々と事態の全貌が明らかになるにつれて、被災された方と同じ国に住む人間としてできることを考えるようになりました。そう考えるようになったのは、この震災が東北の方々だけではなく、日本人全員が痛手を負ったもので、日本全体で復興していかなければならないと感じたからです。

そこで、どのような形でも良いから自分の力の限りできることを探しました。そんな中、ちょうど時間のある夏休みに、教育ボランティアとして参加できるボランティアが宮城教育大学さんから京都教育大学の学生課を通じて紹介されていたため、参加させていただいたわけであります。

【活動概要】

今回参加させていただいた教育ボランティアでは、8月17日～23日の期間で、七ヶ浜町立向洋中学校にて授業補助をさせていただきました。様々な学年の授業に入らせていただき、プリント演習の補助や、ワークブック練習の補助、また実際に英語の授業をするなど、たくさんのお仕事をさせていただきました。

【活動して思ったこと】

今回、この教育ボランティアに参加させていただいて感じたのは、自分の非力さでした。正直、私は未だに、いったい東北の方々(特に児童生徒)に何ができたかが分からないままです。一週間でできることは限られていると思います。その限られた中でも、何か自分ができることはと思って、今回参加させてもらいました。

そして、様々な活動もさせてもらい、生徒と触れ合う機会もたくさんありました。しかし、結局自分が彼ら・彼女らに何かプラスのことができたかと振り返って見た時、本当は何もできていないのかもしれないと思うわけです。

【今後、どう活かしていくか】

今回、実際に被災地に行って教育ボランティアという形でボランティアに参加させていただいたわけでありますが、この経験をどのように活かしていくかが自分に課せられた使命だと思っています。実際に復興前の被災地を生で見てきたと

いうだけでも、自分の人生に大きな影響をもたらしていると思いますし、これからも今回の活動のことを思い出し、刺激されることがあると思います。

また、自分が見てきたこと、してきたこと、体験してきたことを周りの人々に伝えるということにも価値があると思いますし、何よりも教員となった時に、後世を担う子どもたちに伝えていけるということが大きいと思います。実際に活動した中で、自分ができたことは少なかったのかもしれませんが、それ以外の部分で何かできることを考え、役に立てていきたいと思っています。

12月3日に人権講演会というものが京都教育大学で開催され、さっそく、その場でボランティアのことをお話させてもらえる機会を設けてもらいましたので、自分が体験してきたこと、感じたことを伝えていきたいと思っています。

【その他：自由記述欄】

今回のボランティアでは、佐藤副課長様をはじめとして、宮城教育大学の職員の皆様、御一緒に活動して下さった宮城教育大学の学生の皆様、七ヶ浜町立向洋中学校の教職員の皆様、生徒の皆様に変にお世話になりました。

特に、宮城教育大学様には、経済面や施設面など、本来はこちらが用意しておくべきところまで、細やかな配慮をしていただき、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

【まとめ】

今回のボランティアでは、様々な方々の支援と協力の基、様々なことをさせていただき、そして見たり聞いたり体験させてもらうことができました。私が東北でボランティアをしたということは、あまり大きなことではないのかもしれませんが。

しかし、この体験を自分の中で噛み砕き、人に伝えることで、大きなものができると思っています。

最後になりましたが、今回のボランティアを支えてくださったすべての方々に感謝の意を表して、報告書とさせていただきます。本当にありがとうございました。

ボランティア活動報告書

ボランティア活動報告書

「宮城教育大学との連携による活動を通して」

大学名 奈良教育大学 学年 M1 (木下)・4回 (朝田)

氏名 木下智彰・朝田真琴

【動機】

(木下) 今回の東日本大震災が起きた直後から、私はいてもたってもいられなくなり、大学の仲間たちと募金活動を行うために街頭で人々に呼びかけ続けていた。しかし、そうした募金活動を行うことの重要性も十分理解しているつもりではあったが、それだけでは私の気持ちはくすぶり続けたままであった。実際にこうしている間にも、被災地の人々は苦しい日々を送っているのではないだろうかという、思いが頭から離れることはなかった。それは私が幼い頃に経験した震災時に、日本中、世界中の人々が支援の手を伸ばしていた事実によく今になって気づくことができたからである。それに気づくことができた私は、そこでやっと行動に移すことができました。色々な方面、先生方に相談をもちかけ、地震のそうした経験をしていなくとも志を共に抱くことのできる素晴らしい仲間を集めた。そして、被災地の方々に自分たちができる最善の手段を考え、教育を学ぶものとして教育支援という目標をもつことができたことができたためである。

(朝田) 震災が起きたとき、大学で学生オペラという活動の本番直前であり、人との関わりの大切さ、多くの人に支えられて活動ができているということ強く感じていました。音楽の活動を通じて恩返しをすることも考えていたのですが、他に何か恩返しができないか何か役に立てることはないかと考えていた最中に大学から活動の募集があり、参加しました。

【活動概要】

(木下) 8/1～8/3 七ヶ浜町立七ヶ浜中学校・8/4～8/5 大崎市立古川東中学校にて自学自習支援等

(朝田) 9/12～9/16 岩沼市立玉浦小学校

【活動して思ったこと】

(木下) 今回の活動で接した子どもたちは、外見上は私がいつも接しているような中学生と大差ないように振る舞っているように感じた。それは活動の時期的にも、震災からの気持ちを立て直そうとしている子どもの心理状態もあるのだろうと考えたためである。実際に子どもたちは津波や地震の学習を行っている最中であり、それらのことについての質問や話も行うことが出来ていた。しかし、学習の内容以外で話をする機会があった際に、学校外での震災の影響から生じる制限のために耐えなければならない場面があり、フラストレーションが溜まっている様子を感じた。学習という被災した現実から離れ、以前の生活を取り戻すことのできる状況の一つが学校であり、そこから出ると厳しい現実、生活と向き合っている事実を強く感じた。

(朝田) 玉浦小学校に行って、子どもたちに会って、関西の学校の様子と何もかわらないなという印象がすごく強かったです。大阪や奈良で授業補助に入らせていただいているのですが、「子どもたちの本質」といいますか、子どもは子どもなのだと思いました。しかし、初めは被災地の小学校という考えがあったので、何が出来るんだろうとか、子どもたちにどう接したら良いのんだろうかと悩んだときもありました。子どもたちの心の中までは見えないというのが正直なところだったので、学校が大好きな玉浦小学校の子どもたちに私は、ふつ

うにいつも通り、ダメなことはダメとしっかり言ったり、休み時間は思いっきり遊ぶことにしました。

【今後、どう活かしていくか】

(木下) 指導を行う中でも、やはり技術的に未熟な部分は感じさせられた。そうした点を改善することで自分の指導能力の向上に役立てることが可能である。技術的な面も今後活かしていくことができるが、最も大きい力とすることができたのは精神的な部分である。こうした支援を行っていくという決意と実際に経験したという自信をもつことができたことが、今後の人生に活かすことができる。何事にも前向きに取り組むことのできる力を身につけたと考える。また直接的には、子どもたちに災害について話を行う際にも実感の伴った教育を行う自信をもつことができた。子どもたちへこの経験を元に語り、考えをもたせることに活かしていきたいと考える。

(朝田) 5日間活動させていただいて、玉浦小学校は読書活動が盛んだなと思いました。毎朝先生が本を読み聞かせていたり、休み時間になったらみんな図書館に急いで行ったりしている光景を目にしていました。そこで玉浦小学校に本を贈ろうと考えました。5日間の活動で終わるのではなくいつまでつながっているよという証がとても大切だと考えるからです。なので今後、活動に参加したみんなの手紙を書いたり奈良の写真を贈ったりする予定です。

現在、本は大学全体に呼びかけて集めている最中です。また、本を贈ることにしましては玉浦小学校と連絡を取り、小学校の負担とならないように加工をしたりする予定です。

【その他：自由記述欄】

(朝田) テレビや新聞などメディアで被災地のことがたくさん放送されていますが、実際に自分が被災地に行くともメディアからの情報はほんのごくわずかに過ぎないということを感じました。ボランティアに行く前に現地のことを知っておこうと思いニュースなど見たりしていましたが、実際に状況を見て言葉がでませんでした。学校の状況、避難所の実状、その他たくさん、メディアで放送されていないことがたくさんあります。たった5日間しか活動をしていなくておこがましいですが、この活動・経験を伝えることができれば幸いです。そしてこのような活動を続けていくということは難しいことではありますが、とても大切なことだと感じました。教育現場では、子どもたちの心のケアなどすごく大切です。しかし、実際に玉浦小学校の先生方からお話を聞かせていただいて、子どもたちだけでなく先生方の心のケアも必要であるということ強く感じました。このようなことは活動に参加して初めて知ったことでした。

【まとめ】

(木下) 生徒に対してどのように勉強を教えようかということを何度も話す機会があった。

学生たちの教えたいという気持ちが子どもたちにとって必要なこともある(一生懸命伝えようとする気持ちが子どもに伝わる)。確かに学習支援ということでボランティアに来てはいるが、ほんの2、3日で今までわからなかった勉強がわかったり、好きになったりということは現実的に難しい部分があり、それよりも子どもたちが自分たちのことを心配してくれている人がいる、東北以外の地域の人間の話を聞きさまざまな思いを馳せ今後の学習に気持ちを向けさせることができるのが最も大きい作用ではないかと感じた。子どもたちに少しでも良い影響を与えることができたこととすると非常にうれしいことである。また、私自身もそうした活動を行うことができたことで、自分の中で確かな経験としてあり続けると感じた。

(朝田) このような報告会を開いていただき、たくさんの方の話を聞くことができ、情報交換の機会となり大変勉強になると思います。5日間の活動では言葉で表現しきれない本当にたくさんを感じ、学びました。ほんのごくごくわずかなことに過ぎませんがまとめさせていただきました。なにより、宮城教育大学・玉浦小学校・奈良教育大学…その他たくさんの方々の関係者の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

「被災地から学んだ事」

大学名 福岡教育大学 学年 1氏名 畑 勇氣

【動機】

私は今まで被災地に対して、募金等の間接的な支援しか行えませんでした。しかし今回のボランティアは直接的に復興支援できる、ましてや学習補助といった現地の人と直に関わることができるものでした。将来教員になったときに必ず役に立つ、こんな機会は逃してはいけないと感じて、このボランティアに参加しました。

【活動概要】

今年の8月18日と19日の2日間、気仙沼市教育委員会が主催した「夏休み学び教室」という催しにおいて、小中学生の学習の手助けをするというものでした。会場はいくつかあったのですが、私は気仙沼市立松岩中学校で活動を行いました。

午前中は小学生を相手に、午後は中学生を相手にして、各自が持参した宿題や問題集などで分からない点などを教えて回りました。

【活動して思ったこと】

気が付けば早くも一日が終わり、心は充実感でいっぱいでした。自分は子どもが好きだということが再確認できて、やはり教育という道に進んだことは間違いではなかったということも気付くことができました。ただ一つ、被災した子ども達が何気なく言う話に対して、軽はずみな発言はできないことに注意しなければなりません。「家が全壊した」、「仮設住宅に住んでいる」、私たちが被災者の気持ちになることは不可能なので、話を聞くことしかできませんでした。

松岩中学校での二日目は、初日より慣れてきた小中学生がすぐおしゃべりをしだすので、少し大変でした。ですが子どもと話すのが楽しいことには変わりはなく、あっという間に、寂しいながらもお別れの挨拶をしました。この二日間を通して、実際の教師の気持ちに少しでも触れることができたと思いました。



【今後、どう活かしていくか】

今回のボランティアには本学校以外に、愛知教育大学、宮城教育大学の学生や院生が参加しました。やはりさすがは教育大生、皆さんとても明るく社交的で活動に対して積極的でした。そんな彼らに、学生として人として尊敬を覚えるところがたくさんありました。少なくともこれからの教育に対する意識に影響を与えてくれました。

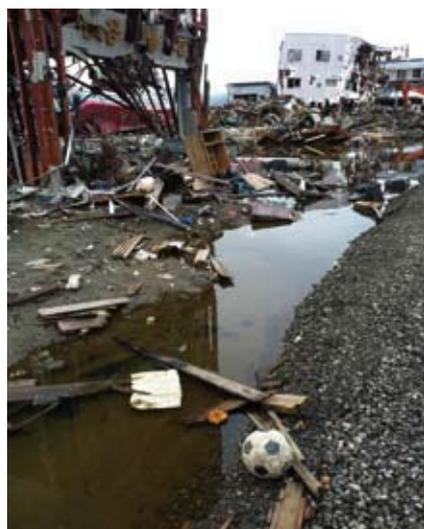
自分が教員採用試験を受ける際に、この経験を活かした論述ができればと思っています。

【その他：自由記述欄】

気仙沼市は仙台駅からバスで約3時間のところにあります。震災の影響でJRではアクセスできず、がれき撤去によりできた一本の道をすべての車が通っていきます。その道中、ほとんど復興が進んでいない被災地の現状を目にしました。

最近ではメディアでもあまり取り上げなくなった現地の様子、ある程度は復興しているだろうと思っていた自分が間違いでした。家の土台だけが残った住宅街、がれきが山積みされた病院、漁船が乗り上げた陸橋。見る光景すべてが衝撃で、残酷で、私は何も言葉にできませんでした。

被災地でもさらに田舎の方になると全然復興が進んでいないことが分かりました。こういった現状をもっと世間の人々に伝える必要があると感じました。



【まとめ】



僕は今回のボランティアに参加して、「心の強さ」というものを実感しました。

実際被災地へと足を運んでみると、想像以上の愕然とする光景ばかりが広がっていて言葉を失いました。そんな中、現地の小中学生と2日間学習を通して関わり、彼らの素直さや明るさに触れることができました。被災者とは思えない彼らの心の強さに、自分自身多くのことを学ばされました。

当日震度5の余震を体験したのですが、僕たち以上に落ち着いた表情をしていた事は言うまでもありません。

勉強のことを上手く教えられたかどうかは分かりませんが、充実した日々を過ごせて本当に行って良かったです。

左図を見て分かるように、現地では小さなボランティアでも新聞やテレビなどに取り上げていて、気仙沼市の人々の温かさに触れることができました。

またこのような機会があれば参加したいです。

「良い経験」で終わらせない

福岡教育大学 1年

與田 くらら

【動機】

震災が起こった日、私は翌日に大学の後期試験を控えていた。そのため、学校で最後の指導を受けていた。不安でたまらない、そんな最中に大震災が起こったことを知った。それと同時に、津波が町を破壊していく映像を見てとても衝撃を受けた。後期試験が延期になった大学、試験すら受けられなくなってしまった人がたくさんいるだろう、そう考えた。それと同時に、自分にできることがあれば、何でもしていきたいという気持ちも生まれた。大学に入学して3か月が経ったころ、今回の教育復興支援ボランティアが募集されていたので、「少しでも力になりたい」と思い、参加した。

【活動概要】



気仙沼市立松岩中学校にて、8月18日、19日の2日間に渡り、小中学生の自主学習をサポートした。午前中は小学生の部、午後は中学生の部と2つに分けて行われた。一週間後に新学期が始まるということもあり、夏休みの課題に追われている生徒が多いのでは、と予想していたが、既に終わらせている生徒が多く見られ、学校で使用し

ているドリルや、漢字練習を自主的に取り組んでいた。

【活動して思ったこと】

生徒たちは、とても集中して勉強により組んでおり、「この問題を最後まで解いてやる」という姿勢が見られた。そして、私が教えることに対して一生懸命理解しようとしており、とても素直な生徒たちだった。また、活動している最中に、地鳴りと共に大きな余震が起こり、すぐに津波注意報も発令された。思いもよらぬ事態に戸惑いを隠すことができない私たちと対照的に、生徒たちの方が冷静だった。教師は勉強を教えることだけではなく、どんな出来事にも動じず、生徒たちを守らなければならない存在だということを痛感した。

【今後、どう活かしていくか】

2日間という短い期間だったが、既に理解していることを相手が理解し易いように伝えることは難しいということ、実際に生徒たちと接していく中で気付くことができた。このことは、実際に生徒たちと接する機会を持つことについていくことだと思う。今後実施される教育実習で、今回の経験を生かしていきたい。また、今回の教育復興支援ボランティアを「良い経験だった」ということで終わらせるのではなく、多くの人たちに伝え、知ってもらうことで、継続的な支援に繋げていきたい。

【その他：自由記述欄】



勉強会に参加してくれた小学生の中に、とても明るくて活発な男の子がいた。私たちにモノマネを見せてくれたりして、人懐っこい生徒だった。その生徒と問題を解いているとき、地震が起きたときの家族の様子、津波が押し寄せてきたこと、そして、その津波で祖母が亡くなってしまったこと

を話してくれた。その時私は何と声をかけたら良いのか分からずに、ただ頷いて話を聞くことしかできなかった。自分の力の無さを痛感し、今でも「あの時どうすればよかったのだろうか」と考えている。

【まとめ】

私は今回の復興支援教育ボランティアに参加して、将来教師になって、東日本大震災のような災害が起きたら、自分の感情を出さずに、目の前に居る生徒たちを守ることができるのだろうか、自分の家族や家のことを心配して取り乱してしまうのではないだろうか、と自分の将来への不安も生まれた。しかし、生徒に勉強を教えること、人と関わることの楽しさを改めて学ぶことができた。そして、この活動を今回限りで終わらせるのではなく、継続的に参加することによって、復興への原動力になることができると考えている。

「復興支援塾 in 女川町」に参加して

大学名 群馬大学 学年 4年

氏名 登川 希香

【動機】

私は震災当日、津波で町が流される様子をテレビで目の当たりにした。その光景はとても衝撃的で、ただただ自然の脅威と人間の無力さを感じるばかりだった。私たちにできることはないかとずっと考えていた。

そして震災から日が経つにつれ、日々ニュースでの被災地の情報や被災した方々の生活を見ていく中で、特に学校関連のニュースに目がとまるようになった。学校再開が遅れたことや子どもの心のケアへの不安などを訴えているものが多く、教育学部で学んでいることが何か生かせないかと思うようになった。実際に被災地を訪れ、自分の目で現状を知ることは非常に重要なことだと感じていた。現地の子どもたちと関わり、少しでも力になりたいという強い思いが生まれた。

そんな時、大学から学習支援の活動を知り、参加することを決意した。

【活動概要】

「復興支援塾 in 女川町」という女川町の企画の夏休み補習授業に3日間参加した。支援グループは女川第一中学校で1・2年各2学級の計4クラスへ2～3人ずつに分かれて入った。国語・数学・英語の3教科のプリントの添削、机間指導や質問の対応や解説を行った。実際に授業を行ったり、提出された作文の添削を任されたりする学年もあった。

また、休み時間には生徒の間に入り、話をして交流を深めた。



【活動して思ったこと】

学校に向かうまでは、生徒にどのように接したらよいのか、どんな言葉をかけてあげたらよいのか不安が多かったが、実際に生徒に会うと元気な様子で、震災の影響を感じさせない印象を持った。しかし、教室の掲示物や作文の内容を読んでいくと、やはり心の奥底には震災に対する思いをそれぞれが持っているようだった。現在の女川第一中学校は、女川一中と女川二中の生徒が混ざった学級で、もともとの生徒ではない二中の生徒はまだ学校に溶け込めていないのか、大人しい印象を受けた。このような生徒間の壁も気になった。

また学習の面では、2つの学校の生徒が混ざっていたり、転校してきた生徒がいたりしたため、生徒個々の学習進度が異なっていて、配慮の必要性を感じた。3日間では生徒の状態を理解し、信頼関係を築いた上での支援は難しかった。

【今後、どう活かしていくか】

まず私たちがしていかなければならないのは、この震災での経験を子どもたちに伝承していくことだと思う。実際に被災地を見て、現地の人話を聞き、肌で感じたことをしっかりと伝えていく必要がある。私たちは自然と共存しているけれど、常に危険と隣り合わせだということを肝に銘ずる必要があると思う。だから、緊急時にこういった行動をし、子どもたちを導いていくのが再確認し、日頃から訓練することが重要だと感じた。これは、地域の人々の参加や協力が不可欠なので、地域との繋がりも大切にしていかなければならない。また、今回の支援を通して、人と人とのつながりやボランティアに必要な心構えを学ぶことができた。このボランティアで新たにできたコミュニティの輪を生かし、より継続的に支援できるよう、それぞれの立場でできる支援のかたちを見つけ行動していきたい。そして、この震災で心を痛めた子どもたちを癒し、安心して学べるよう、心のケアと生活環境や施設の整備を長期的な視野を持ち、行っていかなければならないと思った。

【その他：女川町の現状】



学校自体は高台にあったためほとんど無傷であった。しかし、学校のある高台の下はほとんど跡形もない状態になっていた。8月の段階では学校の電気・水道は復旧していたが、学校の校庭には給水車が来ていた。

女川第一中学校の校舎を女川第二中学校と共同で使用しているようであった。生徒たちは中学校の隣にある体育館で避難生活を送っている者が多かった。また、遠い避難先からバスで通学している者もいた。帰宅するときには支援物資を持って帰るようアナウンスがあることから、物資の面ではまだ震災の影響が残っているようであった。

【まとめ】

三日間という短い期間ではあったものの、得るものは多く、この機会を与えて下さったことに感謝したい。大学生最後の年に、このような経験ができたことは、人生においても非常に大きな意味を持つと思う。この学習支援はこれで終わりではなく、まだ始まったばかりである。大学間の交流を生かして、これからも継続して行い、反省や改善を繰り返しながらより良い活動になるようにしていきたい。その際に、もっと多くの人々が長期間支援できるような仕組みがあると良いが、支援される子どもや学校側の立場を理解しながら、双方のうまくいく形で活動を続けていければよいと思う。

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

「タイトル 子どもたちに寄り添うということ」

大学名 滋賀大学 学年 M2
氏名 入山 久美子

【動機】

今回の震災が起きてから、教育学部で学んでいる私たちに出来ることは何だろうかとずっと考えていました。そして、少しでも現場の先生方のお力になれば、子どもたちと一緒に勉強をしたり、遊んだりすることができたらと思っていました。将来、教員を目指している私たちに出来ること、子どもたちが大好きな私たちにできること、今の私たちにできる精一杯のことをさせていただけたらなと思い、今回の活動に参加させていただきました。

【活動概要】

9月20日～22日の3日間、岩沼市立玉浦小学校と中学校にて学習サポートに参加させていただきました。小学校は、学校行事の振り替えや台風の影響で休校になったこともあり、活動期間が実質1日ではありましたが、各教室での授業補助や教材づくりのお手伝い、給食指導補助や清掃活動等をさせていただきました。

また、中学校では、3日間活動させていただき、主に数学の授業補助を行い、清掃活動、クラブ活動等にも参加させていただきました。

【活動して思ったこと】

学校での子どもたちは、一見すると、元気そうに見えても、校長先生や教頭先生のお話から、震災当時の様子や、現在の子どもの様子を聞かせていただき、決して全ての子どもたちがそうではないということを知りました。震災前と震災後では生活スタイルが変化し、家に帰れば地震のことを思い出してしまう子どもたちもいるようで、私たち自身もそのことを考えながら一人一人の子どもたちと接し、寄り添うことがとても大切なことであると感じました。

また、小学校では実質1日の活動であったため、それを知った子どもたちが残念そうな表情をしていたのが、とても印象に残っています。学習支援に入る私たち学生に会えるのを楽しみにしているのだと感じました。今回の活動を通して、こういった活動は一過性で終わるのではなく、長期的に子どもたちに関わり続けていかなければならないのではないかとことを、あらためて感じました。

【今後、どう活かしていくか】

- ・今回のボランティア活動に参加した後に、滋賀県の小学校へ教育実習に行きました。そこで、子どもたちに岩沼でのボランティア活動のことを話したら、子どもたちは地震が東北で起こったことは知っていても、地震が起こった時どんな状況だったのか、また、今の現地の様子を知っている子はまれで、放射能は人から人へ移るから、近づくとは危険だと間違った理解をしている子もいました。このことから、無知であることによって誤った認識を持つことを防ぐためにも、子どもたちにしっかりと災害教育をしていく必要があると感じましたし、将来、私が教員になったときには、今回の活動で得たこと、感じ考えたことを子どもたちに伝え拡げていきたいと思っています。
- ・私は、今回のボランティアでの経験を友達や身近な人に話したり、現在、ボランティアで関わっている小学生の子どもたちに話したりしました。その人たちがどのように感じ、受け取ったかはわかりませんが、行かなければわからなかったこと、行ったから見えてきたことを周りの人に伝えていくことが、今の自分、今後の自分にできることであり、すべきことであると感じています。岩沼の先生方から学ばせていただいたことはたくさんありますし、その学ばせていただいたことを今後、活かしていくとともに、今回の震災で実際にどんなことが役立ち、いざというときに現場の先生方がどのように対応されていたのかなどを、ボランティアで学んだ私たちが拡げていくべきだと思っています。
- ・一番印象に残ったのが、辛い思いや怖い思いを抱えながらも、前向きに勉強に励む子どもたちの強くたくましい姿でした。私が教員になったときに、大災害を受けても頑張っている人がたくさんいるということや、未来に向かって諦めずに前へ進んでいくことの大切さを少しでも多くの子どもたちに伝えていきたいです。

【その他：自由記述欄】

子どもたちと関わった中でのエピソード

- ・とにかく、子どもたちの笑顔が印象的でした。友達と遊ぶことや勉強をすることが楽しい！という気持ちが子どもたちの様子からひしひしと伝わってきました。
- ・私たちが関西から来たということもあり、関西弁にとっても興味をもってくれた子どもたちもいました。ちょっとした関西弁を教えてあげると、楽しそうに友達と話をしたりして喜んでくれていました。逆に私たちも宮城弁を教えてもらったりし、子どもたちと楽しい時間を過ごすことができました。
- ・岩沼中学校では、新人戦が近いこともあり、2年生が道徳の時間に新人戦への意気込みをそれぞれが書いていました。絶対優勝する！や優勝して先生を泣かせてみせる！といった前向きで力強い言葉が目立ち、私たち自身も子どもたちからエネルギーをもらいました。

【まとめ】

今回、ボランティア活動に参加させていただき、子どもたちと関わらせて頂いただけでなく、現場の先生方から多くのことを学ばせて頂きました。このことは、将来、教員を目指す私たちにとって大変に貴重な経験でありました。また、子どもたちにとって、「学校」という場が、辛いことや悲しいことからいったん離れ、笑顔でいられる大切な場所であることをあらためて感じました。今回の活動を一度で終わらせるのではなく、出会った方々とつながり続けていくためにも、私たち自身で機会をつくり、是非ともまた、玉浦小学校・中学校へ子どもたちに会いに訪れたいと思います。

ボランティア活動報告書

「タイトル 「まなびや」学習支援ボランティア活動報告 」

大学名 仙台大学 学年 4年
氏名 星 隼斗、山崎 えりな

【動機】

3月11日の東日本大震災により、宮城県は大きな被害を受けました。被害の大きかった地域のために、わたしたち学生は何ができるのかと考えていました。大学の取組として、亘理・山元の瓦礫処理や健康サポートに参加しました。そんなとき、「まなびや」の学習支援ボランティアのお話をいただきました。小学校教諭、中学校、高校保健体育教諭、養護教諭など、様々な校種の教員を目指す学生が集まりました。初めは、被災地の子どもたちとどう関わればよいのか、という不安がありました。ボランティアに取り組むことで子どもたちのためになれるなら、と思い、活動に参加することを決めました。

【活動概要】

わたしたちは、小学生を担当しました。低学年、中学年、高学年の3グループに分かれ、学習支援を行いました。主に、国語と算数の学習指導や採点の補助などをしました。休み時間には、ボランティア団体からの絵本や紙芝居の読み聞かせがありました。放課後には、「ちゃっこい図書館」を紹介していただき、子どもたちと絵本を読んだり、遊んだりしました。活動終了後には反省会を設けていただき、山梨県から支援に来てくださった先生方や女川町の先生方、教育長先生から励ましの言葉やねぎらいの言葉をいただきました。

【活動して思ったこと】

初めは、被害の大きかった地域に暮らす子どもたちは、どんな様子なのか、元気な姿を見ることができなのか、と不安でしたが、震災の影響を感じさせないくらい元気に「まなびや」に通う姿を見ることができました。その元気な姿を見て、わたしたちの不安な気持ちが消え去り、子どもたちのために3日間頑張ろうという気持ちになりました。授業中は、どの学年の児童も、次々と問題に取り組む姿が印象的でした。児童の「できた!」「わかった!」という姿は、本当に生き生きとしており、自分がそこに少しでもかかわれたときは、本当にうれしかったです。また、この「わかった!」を一人でも多くの子どもの、一つでも多く感じることができるように、教師が導いていくことが大切であると感じました。それと同時に、そのように指導していく難しさも実感することができました。子どもたちも、学校で友達と一緒に勉強することが楽しいのだなと思いました。

今回の活動を通して、どんな児童でも、様々なことを知りたい、わかるようになりたいと思っていて、それを手助けできるのが教師である、ということに改めて気づかされました。子どもたちに学ぶ喜びを感じさせることができるような教師になりたい。そして、子どもたちと共に成長していけるような教師になりたいという思いが、より一層強くなりました。

女川町の先生方や山梨県の先生方と一緒に活動することで、現役の先生方の指導を見ることもできたので、多くのことを学ぶことができた3日間でした。

【今後、どう活かしていくか】

この大震災が起こったことを、後世に残していかなければならないと思います。被害による悲しみや辛さ、同時に、助け合うことの大切さ、絆の強さなど、震災に遭ったわたしたちだから教えることができるのだと感じました。また、震災で心に傷を負った子どもたちにどう接していけばよいかということも、ボランティアでかかわった現役の先生方から学ぶことができました。今後、教員になって、被害に遭った子どもたちとかかわる機会があるかもしれません。そのときは、今回の経験を活かしていきたいと思います。また、これからも、自分には何ができるのか、ということを考えていきたいです。

【その他：自由記述欄】

授業以外の時間でも、子どもたちの元気な姿をたくさん見ることができました。絵本や紙芝居の読み聞かせに、熱心に耳を傾けている子どもたちが印象的でした。また、女川一小、二小、四小の児童が集まっており、他校の児童ともすぐに仲良くなれる純粋さは、見ていて心温まる光景でした。

読み聞かせの会に集まった子どもたち



【まとめ】

今回の活動に参加する前は、本当に不安でいっぱいでした。被害の大きかった女川町で暮らす子どもたちは、震災によって大きな不安の中で生活していたと思います。しかし、そんなことを感じさせないくらい元気で明るい子どもたちの姿に、改めて子どもたちの強さを感じることができました。この学習支援を通して、子どもたちが何か一つでも「わかった！」と思ってくれたり、元気になってくれたらいいなと思っていたので、一生懸命学習に取り組む姿を見ることができて、本当にうれしかったです。わたしたちも、そんな子どもたちの姿に、教えることのやりがいを感じ、ますます教師になりたいと、目標を明確にすることができました。未来ある子どもたちを支えていけるような教員になろうと強く思いました。

今回の活動は、わたしたち学生にとって本当に貴重な経験でした。このようなボランティアに参加させていただき、本当に感謝しております。私たちも、女川町の子どもたちに負けないように、しっかり前を向いて、目標に向かって頑張っていきたいと思います。

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

「大学間の継続的な連携に向けてー東北大学生の経験からー」

大学名 東北大学大学院教育学研究科・東北大学教育学部
氏名 本山敬祐・佐々木耕太・川上栞

【動機】

- ・ 震災で被災した児童の支えになりたかったため。
- ・ 恩師や、5月から教壇に立つ友人たちの話を聞くことで、被災地において教員免許を保持している自分も役に立ちたいと思ったため。
- ・ 子どものときに阪神淡路大震災を経験していたので、今回被災した子どもの支えになりたかったため。

【活動概要】

- ・ 授業中の学習補助や放課後の学習支援。

【活動して思ったこと】

- ・ ボランティアスタッフは、震災前の子どもたちの様子が分からない。そのため、学級担任の先生から子どもの性格や現在の状況について聞くなど、積極的な情報の共有といった連携が肝要であると感じた。
- ・ 学芸会の発表を見て、子どもたちが、母校の伝統を受け継いでいこうとする意志が垣間見えた。津波でふやけてしまった太鼓を、懸命に演奏する高学年の児童の姿に保護者の方が涙していた。子どもたちの頑張る姿への感動した。
- ・ 大変な体験をした児童に寄り添うにあたって、その子の話から言わんとしている事を傾聴し、しっかりと受け止める事、急かすように背中を押すのではなく、一人一人のペースで前のように行動できるように促す事が大切であると感じた。児童との関わりの根底にすべきは、子ども自身が乗り越えようとする力であり、事実と子どもの感情を受け止め、待つことの大切さを感じた。
- ・ 年度当初の子どもたちは、授業に入ってくる大学生が気になる様子で、ボランティアが入ることでかえって集中できなくなっているのではないかと思うところがあった。また、5月頃は津波のことを話してくる子もいて、学生が戸惑うこともあった。しかしながら、最近は、子どもたちが大学生のことを覚えてくれて、お互いに慣れてきたのか、授業へ入りやすくなったように感じている。

【今後、どう活かしていくか】

- ・ ボランティアに参加して、様々な体験をした児童への対応の仕方を学んだ。将来教員になったときに、話し方や、聴き方といった、心理面のサポート、または学習が遅れがちな児童への効果的な補充指導の在り方等でいかしていきたい。
- ・ 被災地の人間として、今回ボランティアで体験した事の中には、悲しい事、考えさせられるが多いのが事実である。そのひとつひとつの重みを受け止め、被災地域に住む一人として復興に携わっていきたい。

【その他：自由記述欄】

- ・ 震災の体験はこれからいつまでも語り継がれる。とりわけ苦難を乗り越えた人々の絆は、一つの財産として大切にされることを願う。しかしながら、震災を違った角度から捉えた動きが管見されるもの事実である。悲しい事に自分に都合のように事実を歪曲したり、話を食い物にするような活動も見られた。今回の体験は一人一人にとって重要な意味をもつものであり、常に敏感に取り扱わねばならないということを実感するべきであろう。
- ・ 私たち教育関係者が何よりも大事にしたいのは、子どもの笑顔である。どんな環境下にあっても、子どもの笑顔は親でなくとも大人たちを元気づける。教育分野の復興にあたり、子どもたちの笑顔がエネルギーになるよう、彼らの笑顔を第一に守っていきたい。
- ・ 放課後の自習教室として家庭科室を開放しているが、バスの時間が決まっているため参加できる時間があまりないことや、参加してくれる児童が決まってきていること、また、ボランティアの大学生の人数が日によって偏りがあることが今後の課題と考えられる。
- ・ 活動を通じて、子どもたちの成長を感じることができ、また宮教の方とも親しくなれて、このような機会が与えられたことに感謝している。

【まとめ】

- ・ 私たちは5月から宮城教育大学の学生とともに、被災地の子どもたちとともに過ごすことができた。大学の垣根をこえてこのような機会を与えていただけたことに、一同心より感謝している。
- ・ 支援先の学校では東北大学生であろうと宮城教育大学生であろうと、大学生のお兄さん・お姉さんとして同じ学校の子どもたちと向き合うことになる。異なる大学の学生が同じ子どもに向き合うことで、学生間のつながりが形成されてきたと感じている。
- ・ 現在のボランティアで得ている経験や学生間の信頼の意義は現在にとどまるものではないと考えられる。現在ボランティアに参加している学生がいつか教員として宮城県の教育を担うことで教員同士の協力にまでつながり、ひいては宮城県の学校教育がより良くなりうるということを考えると、東北大学と宮城教育大学の学生がともに同じ学校の子どもの支援に携わっていることの意義は大きい。
- ・ 私たちは個人的なつながりをきっかけとして宮城教育大学の教育復興支援ボランティアにアクセスすることができた。上記の利点を考慮すると、東北大学にいる教育に関心のある学生が今まで以上に宮城教育大学の学生と連携して被災地支援に携われる仕組みが整備されることが望まれる。千年に一度といわれる未曾有の災害からの復興を支援するために、協力するのは今しかない。継続的な協力の在り方を模索することが宮城教育大学に最も近い東北大学と私たち東北大学生に求められていると感じている。

ボランティア活動報告書

- ・枚数はA4判 2枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

ボランティア活動報告書

「子ども達とのかかわりの中で」

大学名 東北福祉大学 学年 4
氏名 三本杉 由香

【動機】

私は3月11日、学校で被災しました。後日両親と共に地元での避難生活を送っていたのですが、ニュースで南三陸町などの被害が多かった地域でのボランティア活動の報道がされるたびに、自分も何かできることはないかと考えていました。

私は将来教員を目指しています。この震災を未来の子ども達にどう伝えていくのか、また、被災した子ども達へ何を伝え、どのように支えていかなければならないのか、実際に被災地と報道される場所へ赴き、考える必要があると考えたからです。

【活動概要】

活動場所：南三陸町伊里前小学校

活動内容：教員補助（授業補助・作業の手伝い等）

活動時間：9時30分～15時30分

活動日数：8月29日～9月2日（5日間）

【活動して思ったこと】

通常、私が行っている授業補助のボランティアと同じ感覚で子ども達と楽しく過ごすことができました。活動する前には、「子ども達の心のケアはどのようにしたらよいだろう」と心配でしたが、元気に話しかけてくれる子ども達を見て逆に元気をもらったような気がします。震災発生から約半年が経った今、求められているのはケアや補助と言うよりは、コミュニケーションを通して様々な人と交流し、震災前の生活や活気を取り戻すことなのではないかと感じました。

それと同時に、支援物資の分配など、生活が安定してきた故に発生する問題もあることを知りました。ある程度物資が安定してきている中で、各地から運ばれる物資が余ってしまう場面を何度か目にしました。提供して下さった方々への感謝の気持ちを忘れないと共に、有効に活用するにはどうしたらよいかを子ども達と考えさせられました。

【今後、どう活かしていくか】

子ども達と過ごした1週間は私のなかでかけがえのない思い出となりました。今回は被災地の子ども達の学習支援という形での活動でしたが、子ども達一人一人から、それを支える先生方からも一歩ずつ前へ進もうという意欲が感じられました。

他のボランティアの活動や、将来教壇に立つにあたって、東日本大震災についてはこれからの子ども達に伝えていかなければならないことだと思います。私は震災を実際に体験し、南三陸町という被害の大きかった地域を訪問した人間の一人として、これからの未来をどのように生きていくべきか、自分にできることは何なのかを子ども達と考えていきたいです。そして、この経験を多くの人に伝え、もう一度震災と向き合い、今何が必要で何をすべきかをみんなで考えるきっかけづくりをしていきたいです。

【その他：自由記述欄】

私が将来教員を目指している、という話を子ども達にしたところ、別れの手紙で、「勉強頑張って下さい」「たくさん勉強して、良い先生になって下さい」など、たくさんの励ましの言葉を子ども達からもらうことができました。うれしさがこみ上げるとともに、必ずこの夢をかなえ、教員になろうという気持ちがより一層強くなりました。これからも良い教員となれるよう、勉強を頑張りたいと思います。

【まとめ】

今回のボランティアでは、被災地の子ども達や先生方、一緒に活動してくれた宮城教育大学の皆さんなど、たくさんの人と出会い、たくさんの思い出や良い経験ができました。震災という悲しい出来事がきっかけではありますが、この出会いは私にとってかけがえのないものとなりました。これからの生活において、出会いの一つ一つを大切にし、積極的に関わっていくことが、自分自身を成長させるきっかけとなるのではないかと思います。

今回の震災で、命の大切さ、人とふれあうことのあたたかさを感じました。一日一日を大切にし、毎日を充実したものにできるよう、日々の生活を送っていききたいです。

ボランティア活動報告書

「タイトル ボランティア活動から学んだこと」

大学名 宮城教育大学 学年 4年
氏名 遠藤 しおり

【動機】

震災で苦しんでいる子どもたちの力になりたい、そう思っていた時にボランティアの依頼が大学から届き、参加する運びとなりました。

また、私の自宅はボランティア活動をしている小学校のすぐ近くにいます。近くに住んでいるからこそ話せることや、気持ちを少しでもわかってあげることができるかもしれないと思い、いくつかの依頼の中から「東六郷小学校」を選びました。

【活動概要】

子どもたちの小学校は津波で被災し、仮の学び舎として近くの中学校で勉強しています。しかし、住まいが学校から遠い距離にある子どももいるため、ご家族の方が迎えに来て下さったり、上級生と一緒に帰ったりします。そのため、放課後、教室や校庭で待っている子どもたちの遊び相手や学習支援を、私たちボランティアは行っていました。子どもたちと一緒に一輪車をしたり、砂遊びをしたり、遊びの内容はその日によって異なりました。

【活動して思ったこと】

「子どもたちの心によりそう」

この言葉は、活動前の集まりで阿部副学長が仰っていたお言葉です。そして私は、このことを活動の目標にしていました。しかし、「心に寄り添う」ことは簡単なことではありませんでした。

ボランティア活動を始めたころは、子どもたちの心もどこかざわついていて、なかなか心を開いてくれませんでした。しかし、教育実習などで学んできたことを生かしながら、子どもの目線で話したり、勉強を教えたりするうちにだんだんと仲良くなれたように思います。子どもたちとの距離の取り方や、受容してあげることの難しさを痛感し、これから更に子どもたちのためにできることを探していきたいと思うようになりました。

【今後、どう活かしていくか】

子どもたちは、近くに大人がいるということで安心感が全く違うようでした。やはり、大地震に遭い、津波に追われた経験はトラウマとして心の中に残っているようでした。これは、東六郷小学校だけの問題ではなく、地震の被害を受けた地域全域の子どもたちにも当てはまることであると思います。また、地震のみではなく、様々な問題を抱えた子どもたちにも正面から向き合っていきたいです。将来、子どもたちと関わることができる仕事に就くことができた際には、「子どもたちの心によりそう」ことを意識し、子どもたちが抱える様々な問題と向き合い、子どもたちを笑顔にしていきたいです。

【その他：自由記述欄】

自分自身も津波被害を受け、津波の恐ろしさを痛感していたからこそ、子どもたちを笑顔にしたい、少しでも安心感を与えたいと心から思えたのだと思います。教育実習が途中に入り、あまり多く参加することはできませんでしたが、少しでも力になることができたら幸いです。

リーダーという立場ではありましたが、しっかりと陣頭指揮をとることができなかったことを申し訳なく思います。しかし、メンバーで協力し合い、よりよいボランティア活動を提供できるように努力を重ねて参りました。最初は6名程だったメンバーも、今では20名を超す大所帯になりました。メンバーに恵まれたからこそ、半年の間、そしてこれからもがんばっていけるのだと思います。携わって下さった方々に、心から感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

【まとめ】

ボランティア活動を通して自分自身も大きく成長できたと思います。貴重な機会を提供して下さい、誠にありがとうございました。これからもこの経験を生かし、子どもたちのために様々なことに挑戦していきたいと思えます。

★運動会でのボランティアの様子★



ボランティア活動報告書

「中野小学校ボランティアを通して」

大学名 宮城教育大学 学年 3年
氏名 高木 詩織

【動機】

震災当時、私は実家に帰省していた為直接被害にはあいませんでした。しかしニュースに映る東北の姿を見て、「もう一つの故郷である町で多くの人が大変な思いをしているのに自分は何をしているんだ」とやりきれない思いでした。その後すぐに戻って来られれば良かったのですが、交通の関係や生活環境の確保(電気、ガス、水道等)ができていない中で戻ってくる事ができず、やっと仙台に戻ってこられたのは4月の下旬でした。多くのボランティアが必要とされていた時に自分は周りのために何もできなかったということが自分の中で心残りになっており、震災当時何もできなかった分、何か自分にできることをやりたいとずっと思っていました。そんな時に大学のキャリアサポートセンターから震災復興ボランティアのお話をいただき、自分でも今からできることがあるのなら微力でも力になりたいと思い参加させていただきました。

【活動概要】

- ・ 平日の学習支援(授業補助)
- ・ 物資の仕分け作業
- ・ 放課後の「寺子屋」活動

【活動して思ったこと】

初めて中野小学校に行った時、「元気な子ども達だな。」と率直に思いました。子ども達はすごく元気いっぱい、学生にもたくさん話しかけてくれて、いつも明るく私たちを迎えてくれました。震災を通して子ども達も元気がなくなっているのではないかと考えていたので、予想外の姿に最初は驚きました。しかし、やはり子ども達の中に何の辛い思いがないということではないと何度か活動を通して感じました。自分達がずっと過ごしてきた学校を離れ、多くの仲間達が転校をしてしまい、知らない学校の中で違う学校の子ども達と過ごすということにやはり寂しさはもちろん、最初は遠慮をして過ごしていたように思います。今では中野栄小学校の子ども達とも仲良くなってきて一緒に放課後遊んだりしている姿が多くなりましたが、最初のころは特に昼休みに外で思う存分ボールを使って遊べないこと等が子ども達にとってはとてもやりきれない思いだったのではないかと思います。学校の中で子ども達が気を遣って過ごすということは子ども達にとってもストレスの一つになるように思います。それがちょっとしたことで子ども同士の喧嘩や、授業中の集中力になんか影

響が出てきていたのではないかと思います。そんな中で私たち学生ボランティアが子ども達のために何ができるのだろうと活動をする度に考えました。元の学校に戻ったり、学校環境を大きく変えることは私たちにはできませんが、できるだけ長く定期的に学生が学校に通い、子ども達とたくさん触れ合って少しでも子ども達が変わらない安心できる環境を作ることが大切なのではないかと考えました。

【今後、どう活かしていくか】

このボランティア活動を通して、言葉ではなく行動等に子ども達の気持ちが含まれているのではないかと考えられるようになりました。子ども達の言動の一つでも今まではすぐに注意をしてしまったりすることがありましたが、今回の活動を通して子ども達の行動や一つの言葉に「どうしてこの子は今こんなことを言ったのだろう。」と自分の中で一度考えてみるができるようになったと思います。子ども達の言動には理由がある、ということ念頭に置いて今後の活動や子どもと触れ合う時に大切にしたいと思いました。しかし、それを考えて理由があったから注意をしなくてもいいというわけではないので、考えて理解した上でその場で判断して、注意すべきことはその場で簡潔に注意をしたいと思います。

【その他：自由記述欄】

この活動は中野小学校の子ども達や先生方とのつながりはもちろんできましたが、それと同時に学生同士のつながりもできました。今まで学校生活のみでは関わる事がなかった多くの先輩、同学年、後輩と出会うことができました。こうした人とのつながりができる機会はなかなかなかったので自分にとって多くの人と知り合うことができ良かったと思います。また、中野小学校のボランティアでは宮教大生だけに限らず、東北大学の学生さんや東北学院大学の学生さんとも一緒に活動する機会があり、他大学も一緒になって活動することができたことはとても貴重なことだと思います。

【まとめ】

今回の活動を通して、私達学生ボランティアが子ども達や先生方の力になれているのかは分かりませんが、私自身はこの活動を通して多くのことを学ぶことができ、少なからず成長することができたと感じました。どんなボランティアにおいても継続するということはとても大切なことだと思います。今まで中野小学校の先生方や他大学の学生さん、宮教大生が継続して作ってきた活動を今後もできる限り(支援が必要だと感じられる限り)は続けていきたいです。

ボランティア活動報告書

「生徒たちのために学生ボランティアができること」

大学名 宮城教育大学大学院 2 学年

氏 名 佐藤梨奈

【動機】

私は、昨年から、七郷中で学習支援ボランティアをさせて頂いておりました。震災直後、生徒たちのこと、学校の状況のことが非常に心配になり、少しでも早く生徒たちの学び場が元に戻るよう何かしなければという思いを抱き、ボランティアに参加しました。

【活動概要】

ボランティア初日は、図書室の本が大量に落ちてしまったため本棚に戻す作業、水道が使えないことにより各教室に設置することになった手を消毒するための機器の組み立て、体育館内に設置された仮教室の仕切りの補強などを行いました。また、それ以後は、体育館で授業を受ける生徒たちの学習支援を行いました。

【活動して思ったこと】

ボランティアの初日、震災後初めて生徒たちと会う際に、震災のショックを受けている生徒や今後の不安を抱えている生徒たちとどのように接していこうかということを経々に心配していました。実際に会ってみると、震災以前と変わらぬ元気な生徒の姿があり、明るく話しかけてくることに少々驚きを感じました。しかし、そのように振舞う生徒たちの中には、制服やジャージが流されてしまい、皆とは違う服装で授業を受ける生徒たちがいました。また、授業中何人かの生徒たちが使用している文房具が同じもので、なぜなのだろうかと生徒に聞いてみたところ、文房具が流されてしまったため支援物資でもらったものを使用しているということがわかりました。家族を失った生徒、家を失った生徒、自分が大切にしていたものを失った生徒たちが、明るく振舞う姿を見たわけですが、その姿を見て安堵するのではなく、無理をして気丈に振舞う生徒や不安や恐怖を打ち消すために明るく見せている生徒へのサポートをしていかななくてはならないということ強く感じました。

【今後、どう活かしていくか】

「生徒の心に寄り添う」ということは大切であるということは常々思っていたことですが、それをどのように行っていくのかということは不明瞭なままでした。今回、ボランティアに参加し、明るく元気に振舞う生徒たちの姿を見て、まるで震災なんかなかったのではないかという気がしたほどでした。しかし、そのような生徒たちの姿について様々に思いを巡らせ、それは生徒が自分の不安や悲しみをかき消そうとしている思いの表れなのかもしれない、落ち込んでいる友人を励ましたくて元気に振舞っているのかもしれないということを考えるようになりました。このようなことから、生徒の言葉、表情、行動の表面を捉えるのではなく、その真意を考えていかなくは、その生徒が本当はどのようなことを思い考えているのかということとはわからないということに深く気付かされました。そして、生徒の奥底にある思いや考えを踏まえた上で、「生徒の心に寄り添う」ことができる教師になりたいという思いを強く抱きました。

【その他：自由記述欄】

【まとめ】

震災によって、七郷中の生徒たちは、避難所から通学し、体育館に設置されたダンボールで仕切られた仮教室で学習し、以前とは異なる環境で勉強しなくてはならなくなりました。そのため、生徒たちは、震災による悲しみや苦しみを感ずると共に、以前のような学習環境でないことや部活ができないことへの憤りや焦りも感じていたはずですが。そのような生徒たちに対し、私がボランティアとして参加したことによって、何か果たすことはできたのかということとは不安に感じてはいますが、生徒が休み時間友人と楽しく談笑する姿、懸命に黒板に眼差しを注ぐ姿を見て、「学校」という場の大切さを改めて感じることができました。そして、同時に先生方が、生徒が震災以前と同じような環境で学習や生活ができるようにと、体育館の仮教室の補強を行ったり、学校の破損箇所を修復したりする姿を見て、生徒の学びのために教師が果たすべき役割というものも深く考えさせられました。生徒たちの学びのために、学生ボランティアとしてできることは微力ではあるとは思いますが。しかし、わずかながらでも、学生ボランティアとして行動をすることで、生徒の学びの場をより良いものとしていくこと、そしてそのことによって、震災を復興に向かわせていくことの一助となるのではないかと考えました。

ボランティア活動報告書

「タイトル NPO アスイク 石巻支部での活動を通して 」

大学名 宮城教育大学 学年 学部 3年
氏名 味水佳織

【動機】

地元の中学校に教育実習に来ていた先輩から、NPO アスイクの活動を教えてもらった。
石巻市青葉中学校(10月上旬まで避難所となっていた)での
学習支援ボランティアを募集しており、力になりたいと考え参加した。

【活動概要】

青葉中学校に避難している、
小学1年生～中学3年生までの
子どもたちへの学習支援。
教材は、塾からの支援。



【活動して思ったこと】

- ・ ボランティアとして参加している人が1回に5人しかおらず、1人の先生に対して、子どもが3人～5人という場合も多かった。子ども一人ひとりに先生がつけば、より質の高い学習支援ができたと思う。
- ・ 現役の小学校教員、幼稚園教員、児童館の先生などが主な活動メンバーで、私自身、とても学びが多かった。
- ・ 支援が長期的なものだったので、参加してくれる子どもたちに慣れが生じてしまい、学習と遊びのけじめをつけるのが難しかった。
- ・ 避難所ということで、勉強している子どもの弟妹(幼児)がついてきてしまい、学習と遊びの支援を一緒にするのが難しかった。
- ・ 上記で挙げたような課題を、学習支援の活動後、活動メンバーで話し合い、アドバイスをしあったり、一緒に解決したりするなどの、「事後反省会」があったので、次の活動に活かすことができた。

【今後、どう活かしていくか】

今回、子どもたちと実際に関わることで、震災によるストレス症状はどのようなものなのかを実感することができた。さらに、現役の先生方ともどう対処すべきかなどを、活動の反省会を通して考える→実践することができた。私が将来、教員になった際には、この経験を糧にしていきたい。

【その他：自由記述欄】

【まとめ】

ボランティアをするきっかけは、おそらくなんでもいいのだと思う。友達に「一緒にやろうと誘われたから」でも、「なんとなくやりたかったから」でも。ボランティア活動を現地で実際にしてみて、何を感じたかが一番大切なのではないか。何かを感じた人は、継続的に参加するだろうし、自分から行動もおこすと思う。

宮城教育大学では、学生からの発信が少ないと感じる。学生目線からのボランティア情報や活動記録を発信すること、体験談や反省を学生同士で交流することを、もっと大切にしたい。

「タイトル ユネスコによる被災児童に対する支援活動」

大学名 宮城教育大学 学年 3年

氏名 鈴木 耕平

【動機】

震災後、UNESCO、日本ユネスコ協会及び仙台ユネスコ協会が震災復興活動を行なうことを決めた。それに伴い、仙台ユネスコ協会学生部に所属する東北大学の学生2名(代表、副代表)、及び私(副代表)の3名が中心となり、民間ユネスコ運動発祥の地に起こった未曾有の大震災からの復興の一助となるべく、その活動における積極的な参加を決めた。

【活動概要】

次の二つの活動を中心に行なった。

① 絆 メッセージ・フロム・ザ・ワールド

世界中に被災地の子どもたちへのメッセージを求める、UNESCO(本部:パリ)主催のプロジェクトである。全てのメッセージは被災地であり、民間ユネスコ運動発祥の地である仙台に送付された。世界50ヶ国以上から集まったメッセージは、3万通を越えた。それらを仕分け・分類、翻訳、展示をするのが我々のこれまでの活動である。こうした活動に際しては、随時、友人伝いに、東北大学、宮城教育大学、宮城大学の学生(留学生含)の協力を受けた。最終的には被災した203校もの小学校、中学校、高等学校にそのメッセージを送付する予定であり、年内には全て完了させる見通しである。幾つかの学校には我々学生部が直接被災校へ届けることも考えている。

② 東日本大震災ユネスコ子どもキャンプ(8月4日～6日、宮城県蔵王自然の家)

日本ユネスコ協会連盟及び仙台ユネスコ協会主催の被災児童・生徒を対象としたキャンプで、私が学生の中心となって行なうこととなった。日本テトラパック株式会社の協賛もあり、参加費、交通費を含む全ての費用が無償となった。このキャンプには53名の被災児童・生徒(釜石・大船渡・気仙沼・東松島・仙台)が参加し、宮城教育大学の学生12名のボランティアスタッフと共に、キャンプの運営を行なった。子どもたちはそれぞれ計り知れない程の背景を抱えていたが、キャンプでは生き生きと笑顔で活動し、学生や他の学校の友達と仲良くなる様子が見て取れた。連絡先の交換も認めたことで、皆、これからも切れることのない絆を誓い合っていた。

【活動して思ったこと】

子どもの持つ力をひしひしと感じる。子どもが笑顔であれば周囲は自然と笑顔になり、勇気が湧いてくる。子どもが落ち込んでいれば周囲は焦り、気分は暗くなる。月並みだが、私たちが子どもを支えているようで子どもたちに支えられている。そういったことを強く感じる。キャンプ終了後、日本ユネスコ協会連盟担当者より嬉しい知らせを受けた。

震災後、参加者のある震災孤児はあまりのショックに家で塞ぎ込んでいたという。それを心配した叔母が今回キャンプの参加を決めたそうだ。私たちはキャンプの最中、その事実を知らされておらず、気付かなかった。落ち込んでいる様子は見られたものの、沢山の友達と

仲良く笑顔で過ごしていたからだ。キャンプを終え、帰宅したその子は、笑顔で友達ができたと嬉しそうに叔母に報告したのだという。叔母もあまりの嬉しさに思わず涙したと言う。

自分の行なった活動が報われた。心底嬉しく思った。私はこのエピソードを今後忘れないだろう。子どもが辛い状況の中で、前向きな気持ちになれた。被災した子どもが歩む道は決して平坦なものではない。しかし、でこぼこ道であっても、そこに立ちふさがり幾つもの大きな岩のたった1つかもしれないが、それを乗り越える力を与えることができた。子どもたちの心的な問題について、私たちが無理に取り除こうとしても、それは本当の意味での解決にはならないし、実際不可能である。子どもたちが自力で乗り越えなければならない障壁も数多くある。しかし、子どもたちがそれを乗り越えるための力を得る「手助け」をすることはできる。それも教育の重要な役割である、と私はユネスコ活動を通じて強く感じている。

また、世界各国の日本に対する思いがとてつもなく大きなものであることも実感した。戦火のアフガニスタンからもメッセージを受け取っている。世界中のみんなが日本人のことを想っている。本当にありがたい。早く準備を進めて、世界中の人々の想いのつまったメッセージを子どもたちの手元に届けたい。

【今後、どう活かしていくか】

来年度も継続して活動を行なっていく方針である。将来、どのような道に進んだとしても、何らかの形で教育支援を行なっていきたい。

【その他：自由記述欄】

活動を通して、たくさんの仲間ができた。同じ目標に向かって頭を悩ませながら、共に前に進んでいくことができることは非常に有意義である。



仙台ユネスコ会館にてボランティアスタッフと。

【まとめ】

まさに“Think Globally, Act Locally”の実践ができるユネスコという組織に関わり、震災復興活動を行なえていることは嬉しい限りである。3月11日、私は海外にいた。そのとき郷土で動けなかった分、これからもユネスコで継続的に活動を行なっていきたい。

ボランティア活動報告書

「ボランティア活動の意義」

大学名 宮城教育大学 2 学年
氏 名 安齋 裕美

【動機】

私が東六郷小学校のボランティアに参加しようと思ったのは、今までボランティアに参加した経験がなかったからです。また、今回の大震災で多くの人たちが混乱や不安を抱いている中で自分に何かできることはないかと考えていたとき、このボランティア活動が目に入りました。自分に何ができるか分かりませんが、このまま何もせず時間が過ぎるよりは小学校でのボランティア活動で子どもたちの力になれば良いなと思ったのが動機です。

【活動概要】

主に 1 ～ 6 年生の放課後の遊び相手を行いました。

【活動して思ったこと】

私は約 4 カ月間、東六郷小学校の子どもたちと接して思ったことは、子どもたちの言動や行動についてです。初めてこの小学校に行ったとき、子どもたちはすぐ私に近づいてきました。そして初対面にもかかわらず、ある男の子が私の足を蹴りつけてきたのです。突然のことでびっくりしていると、周りの子どもたちもそれを真似てなのか蹴るや殴るなどやや狂暴的な態度の子たちが多かったので、どうしたら良いのか分かりませんでした。言葉遣いも同様で、乱暴な言葉を言ってみたりしていました。しかし、1 人 1 人の子どもたちに耳を傾けると、「これ、かわいいでしょう」「外で遊ぼう」と言った素直な気持ちが伝わってきました。私は、今回の大震災によってさまざまなストレスを感じ、そのストレスを抱えた子どもたちがどうやって感情表現をしていいのか分からなくなっているのではないかと思います。

現在では、落ち着きを取り戻したように思います。以前のように暴力行為はなくなってきました。このような子どもたちの変化がはっきりと現れたことに、活動の成果のようなもの

を感じました。

【今後、どう活かしていくか】

今回のボランティア活動で、子どもたちがいかにストレスを感じやすいのかが分かりました。そのストレスを解消するきっかけに、少なからず大人や教師の助けが必要だと思います。子どもたちが何を感じ、何を伝えたいのか聞いてもらえるだけで安心するかもしれません。「今後、どう活かしていくか」という問いに対して具体的なことはあまり浮かびませんが、今度はボランティアとしての立場ではなく先生の立場に立ったとき、1人1人と会話をしながら子どもたちと接していきたいと思います。

【その他：自由記述欄】

私は東六郷小学校が以前あった場所を訪れたことがあります。校庭には津波によって運ばれてきたのであろうゴミや木々で散乱していました。校舎はというと、窓ガラスが割れていたり、土砂が教室や幼稚園内に入っていたりしていました。また、小学校の周りには畑に車や樹木があり、仙台市内に住む私の街並とはあまりにも異なった風景がありました。地震の時この学校に子どもたちがいたのか分かりませんが、とても怖い思いをしたことだと思います。子どもたちは、私たちには想像もできないくらい不安でつらい体験をし、中には家族を失ってしまった子もいます。そういった子どもたちから、完全にその記憶や経験を無くすことはできないでしょう。しかし、少しでもその恐怖心や不安感を解消できるようにボランティアや学習支援を通して行うことが必要なのかもしれないと思いました。

【まとめ】

学校の授業の関係でボランティアに行けた日が少なかったけれど、短期間の間でも子どもたちと関わることで私自身学んだことも多かったです。今回の東日本大震災では、多くの人々に影響を与えました。家を無くした人、家族を失った人、友人を亡くした人。そういった点でこのボランティアは、考えさせられることが多かったです。

そして、子どもたちと放課後の遊びを通して関わり、段々と心を開いてくれる様子が分かりました。時間はかかるかもしれませんが、少しずつ子どもたちの気持ちに気付いていけるよう私たち大人や先生が目を向けていることが必要なのかもしれないと思いました。

ボランティア活動報告書

「私にできること」

大学名 宮城教育大学 学年 2年

氏名 井上 久李

【動機】

私自身が被災して、「早くもとの生活に戻りたい」「水や食べ物がほしいな」「何をしたらいいのだろう」「これからの生活はどうなってしまうのだろう」など、いつも不安を抱きながら毎日を過ごしていました。その後、区内に住んでいたためか、私の家のライフラインが早くに復旧し、アパートの倒壊もなかったため、ほかの人よりも早く元通りの生活を取り戻せました。しかし、震災直後に感じていた思いを忘れてはいけないという気持ちから、今でも苦しんでいる人を助けたいと思ったのが、震災ボランティア活動をするきっかけとなりました。

【活動概要】

小鶴新田にある総合体育館で、海水を含んで汚くなってしまった何百枚もの畳を乾かし、それを一か所にまとめる作業と、体育館自体が、泥だしやがれき撤去から戻ってくる人の汚れで汚くなってしまうので、きれいに掃除をしました。

七ヶ浜の向陽中学校で学習支援ボランティアをしました。これは震災の影響で、定められた学習カリキュラムまで到達していないがゆえに、夏休みを返上して授業を受けている中学生のサポートを行いました。

個人的に児童館ボランティアでお世話になっている方から、物資の仕分けボランティアを紹介してもらい、活動もしたことがあります。

【活動して思ったこと】

私が小鶴新田に行った時には、すでに人手が足りている状態で、むしろボランティアに来た人たちが何か依頼されるまで体育館で待機しているというような状態でした。しかし、ここでは足りていても、電車やバスで通れないところでは困っている人が沢山いるので、その差を早く埋めたいなという気持ちでいました。

実際の中学校英語の授業も見学することができ、吸収できることが沢山あって、大変充実したボランティア活動となりました。ここでは、京都教育大学からわざわざ参加された方もいて、今の宮城の状況と比べた京都の様子について聞くことができました。また、生徒は震災からの疲れや不安等はないように見てとれ、子供の前向きにつき進める力に大変感心しました。

物資の仕分けでは、一気に沢山の物が届けられ、物があふれてしまったせいで、9月になっても全国から送られてくる物資を被災地に届けられずにいるのが現状です。仕分けしている

と、手作りの手提げかばんや巾着袋があったり、メッセージカード付きで送られてくるものがありました。こんなに温かい思いを伝えきれずに倉庫に保管しておくことが、とてももどかしく、悲しい気持ちになりました。

【今後、どう活かしていくか】

以前、私は災害学習をテーマにしたセミナーに参加しました。このセミナーでは、震災から子供たちに何を伝え、何を大切に将来を考えていかなければならないのかをパワーポイントを使って模擬授業をする形式のものがあり、震災についてあらゆる角度から子供たちに考える機会を与えるようにしていました。例えば、海岸沿いの町では津波に備えて防波堤を高く建設してあったのだが、逆に今回の震災ではその防波堤のせいで津波が迫っていることに気づくことができなかつたゆえに、多数の死者を増やす結果となってしまった。良かれと思ってやったことが、負の結末をもたらすこともある。このように、私たちはこれからの未来を生き抜くために、あらゆる観点から災害に立ち向かう方法を考えていく必要があるということ、教師になっても教えていきたいと思っています。

【その他：自由記述欄】

この震災が起きて感じたことがあります。それは、災害の発生は、地球が私たちに何かを警告している合図ではないかということです。地球は私たちのように言葉を使って自分の気持ちを伝えることができません。しかし、唯一私たちの肩を叩いてひりむかせるチャンスはこのような災害をもたらすほかないのではないのでしょうか。私たちの自然と共存していく力の欠如や、都合のよいことばかり優先しながら生活していくことが原因となって、地球に負担をかけていることを気づいてほしいがゆえに、災害をもたらしているのだと、私は強く感じました。

【まとめ】

災害ボランティアをただ単にしたから、何かほかの人よりも優れた人間になれたとは思っていません。大切なのは、ボランティアを通して何か感じるものを得て、自分なりに今後のこの経験をどう活かしていくか考え、実行することが大切だと思います。私自身、短期のボランティアだったので、その時にしか感じ取れなかつたことだけが単発に残っているだけです。ですから、この経験を活用できるように、継続した思いや経験が必要なのだと考えます。

ボランティア活動報告書

「伊里前小学校のボランティアを通して」

大学名 宮城教育大学 学年 1年

氏名 横田希子

【動機】

3月11日の東日本大震災から半年近くたち、多くのメディアを通して被災地の近況が伝えられる中、メディアからの部分的な報告だけではなく、実際に行って現状と向き合い自分に今何ができるかを、もう一度考えたかったからです。

また、自分は今まであまり震災ボランティアに携わる機会がなかったので、この機会にぜひ協力させてほしかったからです。

【活動概要】

- ・ 教員補助
（採点 教室巡回 等）
- ・ 学習支援
- ・ 支援物資の仕分け、組み立て
…等

【活動して思ったこと】

南三陸町に着くと、海は瓦礫の山で見えず、町や住宅地はほとんどない状態に唖然としました。伊里前小学校では、2つの小学校が校舎を分け合うという現状、校庭には仮設住宅、教室の窓から見える風景は瓦礫と消えてしまった商店街の跡。子供たちは、毎日この状況の中で生活していると思うと心が痛みました。そんな現状を目の当たりにした瞬間、「自分は何かの役に立てるのだろうか？かえって邪魔になるのでは!？」と考えてしまいました。

しかし実際の活動に入ると、現状に負けない活発な児童たちや、その活動を懸命に支えている先生方の輝きに驚かされました。一人ひとりが自分の役目を全うしようと頑張る姿を見て、先ほどまでの不安な気持ちが吹き飛びました。私も前向きに全力で活動に取り組むことができました。

ただ、活動の中で一番印象的だったのは、児童たちの心の傷の深さです。作文の授業で思い出を文章にする際、多くの子が「津波」をテーマに書こうとしていました。休み時間にも地震の話や津波の体験談を聞かせてくれる子供が多く、表情や口調は明るいものの、内容は生々しく、心の傷の深さを改めて実感しました。そのような話題になったとき、果たしてその話題を広げていいのか、話を変えたほうがいいのか分からなくて、対応が難しかったです。もう少し機転を利かせられれば良かったと思います。

【今後、どう活かしていくか】

私は今回のボランティアで、どんなに些細な事でも力になれるということを知りました。今までの自分は、「被災地に行っても何もできずに邪魔になるだけだろう。」とばかり思っていました。そのため、ボランティアには、全く参加せずに震災から半年が過ぎようとしていました。しかし今回の経験から、非力ながらも、多くのお手伝いをさせていただき、自分の考えを改めることができました。

震災の復興は、1年や2年で出来るものではなく、10年単位の長期戦になるといわれている中で、今のボランティアの数は足りないと思います。だからこそ、今自分にできることには積極的に参加し、すこしでも被災者の方々に寄り添って、元気や勇気を与えられるように頑張っていきたいと思います。

今後は、空いている時間や、長期休業期間などを利用して、もっと多くの震災ボランティアに参加していきます。まだまだ、自分には何が出来るかわかりませんし、何が最善の支援なのか判断できませんが、今回学んだことを存分に生かしながら、出来る限りを尽くしていきたいと思います。

【その他：自由記述欄】



〔伊里前小学校前の風景〕
これは小学校の目の前の風景です。校庭の向こう側に見えるこの場所には、震災の傷跡が生々しく残っています。

伊里前小学校のある高台のふもとにはかつて、商店街での賑わいがあったそうです。今では、すべてが流されてしまい、商店街に自宅を持っていた児童もおおく、仮設住宅で暮らしてい

ます。

【まとめ】

実際現地に入ってみて、復興の遅さを実感しました。まだまだ支援が必要だと思います。震災は過去のものとなりがちです。半年以上がたった今でも震災の傷跡に苦しんでいる人がまだまだいて、その中でも一步一步懸命に歩んでいる状況だという事を忘れてはいけないと思います。被災地に直接入った活動は、多くの学びと気づきを得られました。自分も被災した身でありながら、忘れかけていることがたくさんあり、もう一度自分を見つめなおすいい機会となりました。大学生活はまだまだ始まったばかりなので、この素晴らしい経験をバネにして、卒業までにたくさんの学びと経験を積みあげていきたいと思っています。

ボランティア活動報告書

「初めてのボランティア

」

宮城教育大学

2年

氏名 熊谷真帆

【動機】

東日本大震災発生当日、私は仙台駅で被災し自宅に帰れなくなり、避難所の小学校に2泊した。そこでは、先生方、子供たちにたくさん世話をしていただいたが、感謝を伝えることはできなかった。私は女性で非力なので、がれき撤去などにはできないと思ったが、どんな小さなことでもなにかの形で学校の役に立ち、恩返しをしたいと思っていた。

【活動概要】

教室が使えるようになり、今まで体育館を分割して使っていた教室を校舎に戻すことになったため、ロッカー等備品を移動する作業を行った。

【活動して思ったこと】

短い時間での活動だったが、段ボールの壁だらけだった体育館が、次第にきれいになり、すべての段ボールが片付いた後、先生方がとても喜んでくださっていた。震災発生から今までの特殊な空間での授業の大変さ、苦勞が伝わってくるようだったし、お礼を言ってくださったときの笑顔も忘れられない。自分の小さな力が人の役に立ったことを実感し、うれしく思った。

【今後、どう活かしていくか】

ボランティアをする前の私は「自分が行っても役に立たないのではないか」と考えて積極的にボランティアをすることに躊躇していた。今回は友人も参加したため、勇気を持ってボランティアに挑戦できた。ボランティアに挑戦する第一歩が踏み出せたとてもよい機会になった。

今回ボランティアに行った七郷中学校はバスで行ける距離にあり、これからも機会があれば、ボランティアに参加し、また先生方の喜ぶ顔がみたい。

【その他：自由記述欄】

【まとめ】

ボランティアでどれほど人の役に立てたか、も大切だが、復興のためにたとえ小さくても、「役に立ちたい」と思うことももっと大事なことだと感じた。今回のボランティアの参加者は女子学生が多かったので、段ボールを二人で持って何回も往復したりと、「みんなで小さな力を合わせて大きな一つの力にする」ボランティアだったと思う。

ボランティア活動報告書

「松山小学校へのサマースクール支援」

大学名 宮城教育大学 1 学年

氏 名 戸澤香奈

【動機】

私は、大学の部活・サークルに入っていないのでその代わりに何かやろうと思っていました。その時見つけたのが、このボランティア募集でした。あと、自宅から近い所というのがあります。

【活動概要】

8月22日から24日までの間、サマースクールへの支援。松山小学校の生徒さんたちは、夏休みの宿題をしたり、先生が用意したプリントを解いたり、各自で用意した問題集に取り組んでいました。

私たちは、生徒からの質問に答えたり、手が止まっている子の手助けをしました。

【活動して思ったこと】

子供に問題の解き方を聞かれたとき、答えを直接言わないように教えることが大変でした。でも、教え終わるとお礼を言ってもらえて、嬉しかったです。

どんなふうに教えたらいいか悩んだ時は、先輩方がアドバイスしてくださり、とても助かりました。

【今後、どう活かしていくか】

松山小学校には、「松山助っ人隊」という地域の方による組織があります。私も、今回のボランティアをきっかけに、継続的に松山小学校にかかわらせていただくことになりました。9月の持久走大会にも誘導係りとして、お手伝いしました。

自分のできることから地域の貢献していきたいと思います。

【その他：自由記述欄】

校長先生が、地域の方や学生力を借りるなどして、小学校を盛り上げようと積極的な方でした。私たち若者の意見も取り入れようという意気込みの感じられる方でした。

【まとめ】

松山は震災で大きな被害を受けなかった地域ではありますが、大変な時代を生きていくこれからの子供たちを支えるためにも、地域との連携にとっても力を入れていると思います。

私も微力ですが、少しでも地域の子供たちの役に立てたらと願います。

ボランティア活動報告書

「学府くりはら塾に参加して」

大学名 宮城教育大学 4 学年

氏 名 後藤 恭

【動機】

くりはら塾が行われた栗原市は3月の東北大震災における、最大震度の地域であり、また私の出身地でもあります。今回のくりはら塾のお話を聞いて、心に傷を負った子供たちのケアがしたい、教育大に在学する私にできることで少しでも地元に貢献したい、と強く感じたからです。

【活動概要】

平成23年8月17日～8月21日までの5日間、栗原市内の中学生全学年を対象に、学校で夏休み前までに学習した内容から、国語・数学・英語の3教科で、学生が作成した教材を用い授業をしました。3時間の授業の後には、学習相談（家庭学習の仕方・受験に向けた対策等）も行いました。私は国語を担当しました。

【活動して思ったこと】

今回くりはら塾に参加して、生徒の持っているパワーを一番に感じました。本来ならば、生徒と学習したり、会話をしながらふれあうなかで心のケアをしていくことが私の役目なのですが、逆に生徒たちからたくさんの元気と笑顔をもらいました。生徒たちは、本当に素直で、私が真剣に向き合えば向き合った分だけ態度で示してくれました。生徒たちが、一生懸命にプリント学習に取り組んでいる姿は忘れることができません。

また、くりはら塾後のアンケートで、『後藤恭先生の国語が一番分かりやすかった。分かるまで教えてくれた。』と書いてくれた生徒がいたそうです。本当にうれしかったです。

【今後、どう活かしていくか】

今回のくりはら塾では、国語を生徒にどのように教えたら良いのだろうかというところから始まり、教材の精選にも時間をかけました。受験を控えた生徒たちが、自らの課題を見つけたり弱点を克服することを目標に、より効率よく学習するために生徒を惹きつけられるような話し方や、教え方なども考えながら接したつもりです。授業を重ねるごとに、生徒との距離が縮まるのを感じ、同時にうれしく思いました。

私は、来年4月から仙台市の小学校教員として働くことが決まりました。今回、くりはら塾で中学生たちと関わりをもてたことはとても大きな収穫だったと感じます。関わる年齢は違くとも、まっすぐに子供たちに向き合うことの大切さを学ばせて頂きました。この経験を活かして、小学校の教員として頑張っていきたいです。

【その他：自由記述欄】

〈くりはら塾に参加した生徒たちのアンケートから感想をいくつか抜粋します〉

◎ 1年生

- ・今年初めて学府をやってみてとても楽しかったです。来年もくりはら塾に通ってみようと思います。
- ・勉強の大切さが分かりました。
- ・夏休み中はちょっとだらけていたけど、このくりはら塾のおかげでひきしまった気がします。わからない難しいところをくわしく説明してもらったのでよかったです。

◎ 2年生

- ・とてもじゅうじつした五日間になったと思います。
- ・とても分かりやすく教えてもらったので分からなかったところも分かるようになったのでとてもよかったです。
- ・本当に分かりやすく教えてくれて、とても勉強が楽しく感じました。来年もまた来たいと思います。後藤ゆき先生のが私は一番分かりやすかったです。ありがとうございました。(わかるまでしっかり教えてくれたので。) 来年もまた来て下さい！！

◎ 3年生

- ・3時間で自分の集中がつづく時間の長さだったので良かったです。
- ・しっかりと授業の復習が出来たし、おもしろい授業でした。

【まとめ】

今回のくりはら塾は、阿部副学長先生はじめ、キャリアサポートセンターの皆様、栗原市教育委員会の皆様など多くの方々の支えがあってこそできたものだと感じています。このような宮城教育大学のボランティア活動をもっと活性化させていけるよう、私自身も精一杯協力していきます。今後ともよろしく願いいたします。

ボランティア活動報告書

「タイトル 未来を担う子どもたちとの出会い」

大学名	宮城教育大学	学年	3年
氏名	高橋 周太		

【動機】震災から約4カ月が経った7月、3年次教育実習も終わり、「夏期休業の時期に実際に現地に行って、“学習支援”ということを通して子どもたちに少しでも元気をあげたい」という思いがあった。その頃、気仙沼出身の後輩から今回のボランティアの話をいただいた。震災当初はなかなかボランティア活動に参加できなかったということもあり参加を決意した。また、将来教職に就いた時に、私たちには今回の震災のことを子どもたちに伝える責任もあると考えていた。そのためにも、現地の様子を目に焼き付けておきたかった。

【活動概要】8月18日（木）、19日（金）の2日間、気仙沼市立唐桑中学校で、愛知教育大学の学生さんとともに、午前の部は小学生（3年生～6年生）、午後の部は中学生と分けて、それぞれ2時間半、夏休みの課題や各自の苦手分野の自学自習への支援を行った。2日目の午前の部では、小学生の子どもたちと一緒にレクリエーションも実施した。

2日目の夕方には、南気仙沼小学校の1学年担任の先生から、震災当日・その後の子どもたちの様子についてお話を伺う機会もあった。

【活動して思ったこと】気仙沼の子どもたちと関わるなかで最も印象に残っているのは、行く前に私が思っていたよりも、みんなが元気だったということである。よく聞くことではあるが、私の方が逆に元気をもらわされた。勉強に取り組む姿勢も素晴らしく、「勉強ができる喜び」にもあふれているようだった。

私は様々な場面で子どもたちと関わっているが、気仙沼の子どもたちの方が考えをしっかり持っていると感じた。中学生の生徒さんたちが夏休みの課題の作文で、「これからの気仙沼」というテーマで書いていた。これからの街づくりやエネルギー問題など、まるで中学生とは思えないほど立派な意見を持っていた。また、2日目の活動中には、震度5弱の余震があり、一時津波警報が発令された。私自身初めてのことで、正直に言うと若干足がすくむような思いがした。だが、子どもたちは全く動じず冷静に机の下に隠れていた。

今回の震災を通して（この表現が適切かどうかは分からないが…）、子どもたちは大きく成長できたのだと思う。そして、みんなが「気仙沼」という地域を愛していて、その中で友だちを始め、人とのつながりを実感しているとも感じた。

【今後、どう活かしていくか】これから時間が経ち、復旧・復興が思うようなスピードで進まないこともあるだろう。そのなかで、子どもたちの気持ちにも変化が生じてくるかもしれない。私たちが行った8月には元気であったとしても、その後にストレスが溜まっていった辛い気持ちになってしまう可能性もある。また、今回のボランティアで子どもたちが見せてくれた笑顔も心からのものではなく、心の奥底にはまだ不安などがあったかもしれない。

よって、今後も長期休業などの時には現地に赴き、継続して子どもたちとの関わりを持つようにしていきたいと思う。そして、南気仙沼小学校の先生からお話を伺った時、私たちに最も望むことは「今回の震災のことを忘れないでほしい」ということであった。気仙沼の子どもたちのことをしっかりと胸に留め、自分に何ができるかを考えていきたい。

【その他：自由記述欄】今回の学習支援ボランティアを通して、私たちがやらなければいけないと思ったことがもう一つある。それは、「防災教育」についてである。教員養成大学で学ぶ者としては、将来教職に就いて大地震が起きた時に、冷静かつ素早く、適切に動けるように、今回の震災から教訓とするところはそうしていきたいと強く思っている。避難訓練のあり方なども考えていきたい。

また、「避難所」としての、学校が果たす役割の重要さも強く感じた。南気仙沼小の先生からは、食事の分配や暖の取り方、トイレの管理などの実際の話も多く伺った。そこまでなされたということにかなり驚かされた。それと同時に、「教師」の果たすべき役割と、地域のなかでの「学校」という存在の大きさも改めて実感した。

【まとめ】今回の学習会は、子どもたちにとっては夏休みが終わる数日前という時期であった。そのようななかであるにも関わらず、小学生も中学生も、30人ほど集まってくれた。これがなぜかと考えてみるとやはり、「友だち・先生に会える」、「一日のうちの大半の時間を過ごす」などという、子どもたちにとっての「学校」の存在の大きさによるところだろう。この学びの場が早くもとに戻るように、私もできることを継続していきたい。

また、子どもたちの中には、今回の震災で家族を亡くしてしまった子もいるかもしれない。その悲しみはとても大きいものであり、私にはその「全て」を受けとめてあげられるだけの自信は、正直に言うと、あまりない。だが、出来る限り、理解・支援していきたいと決意している。それが、この宮城県に生まれた者としての使命でもあると感じている。そして、この「宮城」の地で教職の就きたいという思いを今まで以上に強く抱いた、この2日間のボランティアでもあった。

最後に、南気仙沼小の先生がおっしゃっていたことを記しておく。

「子どもたちは、『この震災を、この気仙沼の地で、ともに経験した先生・友だちと一緒にじゃないといやだ』と思っているんです。」

「気仙沼」という地に強く残る、「絆」。このつながりは、新しい気仙沼の誕生に向けた大きな第一歩と、すでになっているのかもしれない…。

ボランティア活動報告書

「タイトル ボランティアは自己成長に繋げられる 」

大学名 宮城教育大学 学年 4年
氏名 高橋 遼

【動機】

- ・キャリアサポートセンターからボランティアの募集があり、余った時間をもったいないと感じせっかくなのでボランティアに参加し、時間を有効的に使おうと思ったから。
- ・今後教師になるにあたってたくさん子どもたちとふれあい、どんなこどもがいるのか知りたかったから。

【活動概要】

- ・学習支援（教室活動・体育館など）
- ・寺子屋：放課後のバスの送迎までの時間を使い勉強の支援をしたり、一緒に外で遊んだりする

【活動して思ったこと】

子どもたちに直に触れ合える機会があることはとても素晴らしいです。通常の生活を送っていても、塾や教育実習でしか会える機会がないが、学校のボランティアに参加することによってこのような機会を設けられたことはとても有難いことです。

また、子どもたちからも学ぶべきことが見つけられ、自らの成長にも繋げることができた。

【今後、どう活かしていくか】

今まで感じていた自身の考えに固執せず、子どもたちとふれあい考えを改められるのではないかと感じた。子どもはこうだ、教師はこうだではなく、子どもたちのために私たちがどのようにしていく必要があるのかを考えていきたい。

【その他：自由記述欄】

ボランティアを面倒臭がってやろうとしない人も多いかと思うが、教師になりたいと考えているならば、学校ボランティアは参加するべきである。子どもに直に触れ合うことでわからないこともたくさんあるから、もし迷っている人がいるのであればぜひとも参加してもらいたい。

【まとめ】

参加して初めてボランティアがよいものだ気づいた。それは、自己成長に繋がれるからである。教育者としてどのような事を考える必要があるのか考えられるし、自分としてはどうできるかということも考えられる。

ぜひとも時間があるのであれば、子どもたちのために参加して一緒に活動して行って欲しい。

ボランティア活動報告書

「素直な子供たち」

大学名 宮城教育大学 学年 1
氏名 黒澤 千洸

【動機】

- ・ 夏休み期間を利用し、教職について考えてみようと思ったから。
- ・ ボランティア活動に前々から興味があったから。

【活動概要】

- ・ 富永小学校の小学四年生の学習支援
(主に算数・国語が中心。他に児童各自で持ってきた教材への解説など。)

【活動して思ったこと】

- ・ 子供たちが初めて自分たちに会うにもかかわらず、積極的に関わってくる姿に驚きを感じた。
- ・ 最初は勉強に弱音を吐いていた児童も、丁寧な解説を行っていけば、きちんと理解してくれた。
- ・ クラスの学習状況がまちまちのため、皆のためになる教材選びをするのが自分たちの判断だけでは難しかった。
- ・ 子供たちが明るく、元気であったことが印象的だった。
- ・ 「勉強する」という時間を設けると、子供たちがちゃんと学習に取り組んでいて立派だと思った。

【今後、どう活かしていくか】

・今後、訳あって中学2年生になる妹の家庭教師を任されることになりました。妹は数学が苦手でもちよこちょこ教えてはいたのですが、どうにも頭には入っていなかったようです。もしかしたら教え方が悪かったのかとボランティアを受けた後に思いました。なので、今回の経験を生かし、妹の高校第一志望高校合格をサポートできるように頑張っていきたいです。

【その他：自由記述欄】

ボランティアを始めて最初の頃は、目的地である富永小学校までの約1時間のバス移動があまりにも退屈で、着いた頃にはくたくたになっていました。

しかし、元気で明るく素直な子供たちと一緒に学習することで、小学校に行くのがすごく楽しみになり、「またあの子供たちの笑顔に会える」と思うと心が躍ると同時に最終日は子供たちと離れるのが寂しく感じられました。

でも、最後のバス移動に中で見た、子供たちと一緒に撮った集合写真は、今でも大切な思い出です。

【まとめ】

間違いなくこのボランティアを引き受けたことで、担当した児童達だけではなく、自分自身も大きく成長できたと感じることができました。特に、「人のことを思いやる心」がより一層身につけることができたと思います。

とはいっても、自分のボランティアがこれで終わるわけではありません。

教師の卵としてこれから勉学にさらに取り組んでいく身としては、まだまだ学ばなければいけないことがあります。

今回をスタートとし、自ら学びにいく気持ちを忘れずに、これからの経験につなげていきたいと強く思っています。

ボランティア活動報告書

「 輝く笑顔 」

大学名 宮城教育大学 学年 4年
氏 名 佐々木 久枝

【動機】

3月11日、東日本大震災が発生し、私も被災者の一員となった。震災直後は、度重なる強い余震に怯えるなか、身近な人の安否確認や、食料や水の確保などに追われ、自分自身のことでも精一杯だった。だが、4日経ってライフラインが復旧すると、それまで知らなかった情報を目にした。生まれ育った宮城県は、地震の揺れだけでなく、直後に発生した巨大津波によって甚大な被害を受け、多くの人々の命や、生活資源を奪っていたのだ。しかし、連日テレビで放送される目を覆いたくなるようなニュースと共に、避難所で元気に食料を避難者に配る手伝いをしたり、新聞を書いたり、自分にできることを一生懸命行っている子ども達の姿があった。辛い状況においても他者を思いやる彼らの行動を見て、未来の宮城を復興させる力強さを感じ、私も学習支援や話し相手という立場で子ども達に関わることで、共に故郷に貢献したいと思いボランティアに参加した。

【活動概要】

- ・学習環境の整備、学習支援、生徒の話し相手等。
- ・キャンプのお世話役。

【活動して思ったこと】

学習支援を通して、特に中学校3年生は授業開始が遅れたことで、受験勉強に悪影響を及ぼすことを不安に思っている生徒が多いと感じる。また、余震が続く恐怖や、非日常的な生活を強いられているせいか、勉強に集中できない様子が感じられる生徒もいる。

キャンプでの活動では、全世界から被災した児童生徒に向けたメッセージを読み聞かせる時間があった。毎日、たくさんの人から「がんばれ」と応援されていることが重荷になっているのか、あまり興味をもっていない子どもが多くいたように感じた。もしかしたら、応援されることで3月11日の記憶をよみがえらせてしまうことがあるのではないかと考える。だが、親元を離れ、自然のなかで新しくできた同じ境遇の友だちと過ごすことは、子ども達の良い気分転換になったと思う。

【今後、どう活かしていくか】

自分自身が震災を体験して感じたこと、被災した子ども達が現在どのような生活を送っているかを、未来の子ども達に伝えていきたい。

【その他：自由記述欄】

震災後、学習支援を行った中学校で、現在学校教育ボランティア相談委員として活動している。活動概要は、主に学習支援、生徒の話し相手である。

【まとめ】

学習支援を通して、生徒は一生懸命学習や活動に取り組み、私に笑顔を見せてくれる。それを見ると、私自身が励まされて自然に微笑んでしまうのである。そして、児童生徒のなかには、自分から震災について感じたことや考えたことを話してくれる子がいる。しかし、その一方で自分の気持ちを適切な言葉で他者に表現できず、一人で活動するのが好み孤立したり、教師や友だちに反抗的な態度を示したりする様子もうかがうことができる。このような姿は、震災を経験したことで、友人・家族・家を失ったことの喪失感や、非日常的な生活をせざるを追えないがために生じるストレスが要因だと考えられる。

被害の大きさから、未だ子どもの生活は震災前と同じ状況まで復旧できていない。また、友人や家族を失ったという事実を受け入れて生活していくことは、大変難しいことである。このことから、子ども達の心のケアはこれからもより一層重要視され、支援は一時的なものではなく、長期的に必要なだと考える。そこで私は、大学を卒業するまで震災後にボランティアを行った中学校で、学校教育ボランティア相談委員として精一杯子ども達とかかわっていかうと思う。

ボランティア活動報告書

「中野小学校学習支援ボランティア活動報告書」

大学名 宮城教育大学 学年 3

氏名 佐藤 愛里

【動機】

以前からボランティア活動に参加したいと考えており、機会をうかがっていました。今回、コースの先輩から、「ボランティアチームに参加しないか」と誘われ、ちょうど活動したいと思っていたことと、被災地の子どもたちのために、何か力になりたいと思ったため、参加することにしました。

【活動概要】

主に授業中の学習補助、放課後の遊び相手、宿題の手伝いなどです。特別支援学級に補助に入ることもあります。学習補助では、図工、音楽、書写、理科の制作など、活動的学習の際に、作業が遅れている子どもの補助をしたり、担任の先生の補助を行ったりしています。放課後には、貸し切った教室に「寺子屋」と名付け、曜日毎に「遊びじゅく」「学びじゅく」として、宿題の手伝いを行ったり、校庭で遊んだりしています。寺子屋はまだ始まったばかりで、これからもっと積極的に活動していけたらと思っています。

【活動して思ったこと】

私が思っていたよりも、震災の影響は子どもたちにとってとても大きなものだったのだと知りました。子どもたちは授業中や生活の中で落ち着きがなかったり、学習が他の学校よりも遅れていたりと、影響は目に見える部分にも表れています。家が流され、仮設住宅に住んでいるために、家に帰っても十分な勉強スペースがなかったり、自由に遊べずにストレスがたまっている子どもも多くいるようです。一見普通の様子に見えますが、ふとした瞬間に感情が不安定になることがあるようです。そんなとき、どのように対応したらよいか、何と声をかけてあげればよいかかわからずに、力になれずもどかしい思いをすることもあり

ました。私自身も震災によりかなり大きなショックを受けたのですが、家が流されたり、知り合いがなくなったりという経験はしていないので、震災後の環境の変化が子どもたちとの間に違いがあり、子どもたちの思いを完全に理解してあげることができないことに、悔しさも感じました。

ボランティアをすること自体に関して思ったことは、小学校は毎日本当ににぎやかで、活力があふれているということです。子どもたちは元気いっぱい勉強したり遊んだりしていて、先生方はそんな子どもたちを育てていくために奮闘した毎日を送っているのだと感じます。また、ボランティアは子どもたちに教える教師としての立場に立つことになるので、教師目線で授業や子どもを見ることができ、とても勉強になります。先生は授業をしたり子どもに関わるだけでなく、例えば学習発表会の準備をしたり、学校内で何かアクシデントが起きた時にそれに対応したりと、いわゆる雑用と呼ばれることもしなくてはならず、何でもできる器用さや、忙しい中でいかに効率よく仕事をこなせるかという能力も必要になってくるのだと知りました。

子どもたちの遊び相手にもなっていますが、震災にも負けずに、毎日元気よく遊ぶ子どもたちに逆に元気をもらっているような気がします。週に1回でも、何度かボランティアを訪れていると、子どもたちの顔を覚えて、よりかわいらしく感じたり、子どもたちのほうも私の顔を覚えて慕ってくれるようになり、また次の週も来てもっと子どもたちと関わっていきたいと思うようになりました。

【今後、どう活かしていくか】

私は将来、教師になりたいと思っています。今後は、教師になるため、そして教師になってからに生かしていきたいと思っています。

ボランティアを通して、子どもたちと触れ合ったり、先生方の補助を行なうことで、学校の中での教師の役割や、子どもたちへの授業の仕方、生活面での指導の仕方、接し方を学び、吸収していきたいです。

また、子どもたちの心への震災の影響というのは、簡単に消えてなくなるものではなく、長期的に支援していかなければなりません。このボランティアをする中でも、そして教師になってからも、子どもたちの心のケアをする上で、生かしていけたらと思っています。

【その他：自由記述欄】

【まとめ】

このボランティアは長期的に、継続して行なうことが大切であると思います。私自身はボランティアに入った日数はまだまだ少ないですが、これからもチームのメンバーと協力しながら、ほんの少しだけでも中野小学校の力になれるよう、積極的に活動を行ない、尽くしていきたいと思っています。

ボランティア活動報告書

「海を見て」

大学名 宮城教育大学 1年

氏名 佐藤 美理

【動機】

今回の東日本大震災を自分の体で体験してみて様々なことを考えた。ボランティアといってもできることは限られているし、大きなこともできないこともわかってはいたが、まず行動したい、もう一度被災地に足を踏み入れて実状を自分の体で感じ取りたいと思ったから。また、実際足を運ぶことで新聞やテレビなどでは感じられないことを感じ、知らないことを知ることができる。私たちがまずこれからすべきことは未来に伝えていくことであると私は思う。だからまず“知る”ことから始めようと思ったから。

【活動概要】

〔8月29日岩手県陸前高田市広田半島にて〕

田んぼ跡地の草刈り、がれき・岩・石の撤去

コープー関コルザ店集合⇒(バス)⇒岩手県災害ボランティアセンター(陸前高田)⇒

地元の方の依頼による活動の割り振り⇒(バス)⇒活動⇒(バス)⇒

岩手県災害ボランティアセンター⇒(バス)⇒コープー関コルザ店解散

【活動して思ったこと】

胸の奥底で何か大きなものを感じた。つらい、悲しいといったような単純な気持ちではなかった。目でがれきの山や何もない地面を見て、その上を自分の足で歩いて、波の音を聞きながら、さまざまなことを考えた。

今回の依頼されたのは津波にのまれた田んぼを再び田んぼとして利用するために、田んぼに生えた雑草を刈り、岩や石、がれきをまず田んぼの外に出すことである。暑い日だった。あの日から半年近く経っていて、大きながれきはなかったが、雑草が田んぼの姿を失わせていた。私は草を自分の小さな手で握れる分だけガサッガサッと刈っていった。重い岩一つずつ田んぼ跡地の外に運んだ。30人以上のボランティアが半日はたらいて、田んぼ2枚も終わらなかった。そこで私は、私達ができることは本当に小さなことなのだと、初めて体で実感した。他のボランティアの人たちからは、「なんか来た意味あったのかなあ・・・」「もっと何か違うことができるとおもったんだけど・・・」という声が聞こえた。気持ちは分かる。しかし、そう感じたことに私は意味があるのだと思う。

自分たちができることは小さい。でもだからこそ、その日感じたことを胸に刻んで、これからも支援を続けていかなければならないのだと思った。先は長いと私は悟った。

【今後、どう活かしていくか】

やはり、誰でも自分の生活を営むためにすべきことがある。ボランティアばかりしているわけにはいかない。しかし私たちみんなにできることは、3月11日に何が起きたのかをしっかりと胸に刻んで未来に語り継いでいくことだと思う。ボランティアもできるときに継続していきたいが、まず、私はそれを実行していくと心に決めた。

また、当たり前の生活がどんなに幸せかということを改めて感じさせられた。自分の家があって、家族がいて、故郷が変わらずある。私は毎日を大切に、一生懸命生きていきたいと思った。

【その他：自由記述欄】

活動場所が海の目の前で、私はお昼を海を見ながら食べた。波を見つめた。この波が、すべてを奪っていったのだと思った。しかし憎しみなどわいてこなかった。海は、何もなかったような顔をしていた。いったい誰が悪いというのだろう・・・しばらく私はそう考えてしまった。一日でも早く、被災地の方々が海とともに生活できる日が来ればいいなと思った。

【まとめ】

また、私は活動中に一人の若い男性と話をした。その人は、自分のお世話になった高校の先生がまだ行方不明でやり切れない思いで参加したという。悲しい目をしていて、体がじっとしていらなかったのだろうと思った。たまたまその先生は私の高校に実習に来ていた先生で私も知っていた。その先生は水泳部の顧問の先生で、一度避難したにもかかわらず、プールに残っている生徒を助けるために引き返したという。

今回の東日本大震災は、多くの人の命、生活を奪い、そして人々の心に大きな傷を残していった。この震災で失ったものは大きい、得たものも大きいはずだ。このことを忘れずに、そしてこの震災を経験していない人にも伝えていきたい。

ボランティア活動報告書

「学校支援ボランティアを通して」

大学名 宮城教育大学 学年 3
氏名 佐藤 佑一

【動機】

自分の所属しているコースの先輩に中野小学校で以前から活動を行っている方がいらっしゃり、今回の震災を受けて学校支援ボランティアを募集しているという知らせをいただいたことがきっかけです。また、教員になる上でボランティアの重要性や3月の震災を受けて自分にも何かできることはないかと思い、このボランティアに参加することにしました。

【活動概要】

教師が行っている授業のサポートをしたり、子どもたちの学習をサポートしたりすることが大きな活動内容です。また、「遊びじゅく」「学びじゅく」といった放課後に子どもたちをサポートする寺子屋を9月から行っています。

【活動して思ったこと】

自分は5月中旬からこのボランティアに参加させていただいているのですが、当初の子どもたちの様子と現在の様子は大きく変わってきていると思います。当初はどことなく落ち着きがなく、心に不安を抱えていることが自分にも見てとれました。中野小学校は学校がほとんど流されてしまったと聞きます。

ある日、清掃をしている子どもたちの会話に「あの日、大掃除をしたんだっただよね。でも大掃除したのに、全部流されちゃって…。また、地震来たらどうしよう…。」この言葉がとても心の中に残っています。震災という出来事があまりにも子どもたちにとって衝撃の大きい出来事であったのだと改めて実感しました。

教育実習の期間を除いて、ほぼ毎週のように子どもたちと関わってきました。ボランティアに参加する際には、できるだけ笑顔で子どもたちに接しようとしてきました。子どもたちの支援というよりも自分自身がたくさん子どもたちから学ばせてもらっているように思います。最近の子どもたちを見ているととても元気で明るくなってきていると感じます。

【今後、どう活かしていくか】

今も毎週木曜日の午後にボランティアに参加させていただいています。だいぶ子どもたちも普段の姿を取り戻しつつあると先生方から伺っているので、子どもたちにさらに積極的に関わっていけるようにしていきたいです。ボランティアとして以上に教師になることを志す身として、貴重な機会をいただいていると思うので、子どもたちからも先生方からもさらにたくさんのことを学び、吸収していきたいです。

【まとめ】

今回の震災を受けて、子どもたちの心に受けた傷は大人のわたしたちの受けた傷よりも何倍も大きなものであると思います。また、先生方も多くの仕事を抱える中で子どもたちとの関わりというのはとても大変であると感じます。

そういった中で、教師を目指すわたしたちが子どもたちと一緒にいてあげることによって安心感を与えることができたり、先生方の多くの仕事を少しでもスムーズに行ってもらうことができたりと、このボランティアにできることはたくさんあると思います。自分自身こういったボランティアをしていく中で子どもたちの心理であったり、どういったことを考えたりしているのかを知れることはとても大きいです。完全に元通りになるまで先は長いとは思いますが、出来る限りボランティアに参加することで子どもたちとそして先生方とも心を通わせていけたらと思います。

これからも大学生だからこそできることを自分で気づき・考え・行動できるようにしていきます。

ボランティア活動報告書

「タイトル ボランティア活動を通して」

大学名 宮城教育大学 学年 3年生
氏名 三瓶真実子

【動機】

自分にもできることはないだろうか。その気持ちからわたしはボランティア活動を行った。また、今大学で学んでいることが生きるようなボランティア活動も多くあったので、なおやりたいと思った。

【活動概要】

- ・ 避難所における視覚障害者のガイドボランティア
→避難所におけるマッサージコーナー運営のお手伝いやガイド
※その中で、避難所で生活する小学生からお年寄りの方々とのかかわりがあった。
- ・ 石巻支援学校において、避難所運営の手伝いや子どもたちとの遊び（二泊三日）
→避難所で過ごす石巻支援学校の児童・生徒と遊んだり、高校生の勉強をみたり、避難してきている人だけではなく、県外から来た人や先生方とのかかわりがあった。
食事の準備や掃除といった避難所運営のお手伝いもした。
- ・ 夏期休業中の学校支援ボランティア（大塩小学校、鳴瀬第二中学校）
→大塩小学校：二日間小学3年生のクラスに入って学習支援を行った。
→鳴瀬第二中学校：一日だけ中学3年生の生徒の個別学習の学習支援を行った。
- ・ 視覚障害者のガイドボランティア
→震災による影響により、ある場所に週一度ガイドをしている。

【活動して思ったこと】

ボランティア先には、いろいろな人たちがいた。特に、避難所でボランティア活動をしている際、そこにいる方々と一緒に時間を過ごさせていただいたのだが、その中で様々な話をした。楽しい話もした。それとは逆に、言葉に詰まり、何を口にすれば良いのか分からない場面もあった。どんな顔をすれば良いのかも分からない時があった。そんなことを繰り返す中で、私は「自分にもできることはないか」という気持ちからボランティアに行ったのだが、「本当に自分にできることとは何なのか。」と、何度も自分に問いかけたことを覚えている。また、ボランティア活動をしていて、これが長期的にかかわることができたら、また何か違うだろうと思った。特に、学校への学習支援ボランティアでは、「もしまた明日もこの子ども達とかかわることができたら。もう少し深くかかわれるようなかかわりをしていけたら。」というようなことを思った。もちろん、たとえかかわる時間が短くても、そのかかわ

りには必ず意味がある。だから、かかわる期間が短期間であろうと長期間であろうと、そこはさほど問題ではないのかもしれない。だが、今回子ども達とかかわっていて、「もう少し、もう少し」と思う自分もいたことは事実だった。子ども達の姿、表情が忘れられない。

【今後どう生かしていくか】

今回のボランティア活動を通して、これからにどう生かしていくかと考えると、様々なことが挙がってくる。というのも、今回のボランティア活動においてかかわった人たちの話がいくつもよみがえってくるからだ。私がこれまでに持っていた世界観にも、影響を与えるものだったと思う。私は、今回出会った人たちに教えてもらったことを、自分自身のものの見方や考え方に生かしていきたい。また、これから出会うであろう子ども達にも、何かしらの形で生かしていかなければならないと思う。それが、わたしにできることの一つだと思う。それは、子ども達の命を守ることにつるながることもあるだろうし、子ども達の生活を守ることにもなると思うのだ。

【その他：自由記述欄】

私は、今回のボランティア活動で子どもからお年寄りの方、また、宮城県だけではなく遠くから来ている人たちといった、いろいろな人たちとかかわることができた。ここには書けないが、本当に様々な話をしていただいた。ずっとわたしの中に残ると思う。

避難所にいた子ども達は、様々な表情をしていた。友達と楽しそうに過ごしている子ども達が多かった。時々、子ども達を見ていて、心の奥に何を抱えているのだろうかと思う時があった。そんなことを感じたからこそ、「もう少し、もう少し」と思ったのかもしれない。短い時間ではあったが、一緒に何かをしていて子ども達が笑うと嬉しかった。次は何を一緒にしようかな、何がしたいのかなと、私も夢中だった。

今回出会った人たちに、またどこかで会えたらいいなと、体調を崩さないでいて欲しいなと、そんなことを思う。

【まとめ】

ボランティア活動をしていて、特に4月頃のボランティア活動では、自分で精一杯になっていた部分があった。自分にできることをしようという思いからだ。それがいけないことという訳ではないのだが、私は最初の頃、「自分にできることをしたい。」という自分の思いばかり見えていたように思うのだ。

「自分にできることは何なのか」。周りの状況を見て、そこにいる人々とかかわる中で、自然に、自分にできることをしていけるようになりたい。そして、今回出会えた人たちに、感謝の気持ちを伝えたい。

「震災ボランティアを通して」

宮城教育大学

3年

山科 友理恵

【動機】

東日本大震災が起きたとき、私は地元に戻省していました。幸い地元で大した被害はありませんでしたが、第2の故郷である宮城県のために何もできない悔しさや自分の無力さに声をあげて泣きました。今回の震災で心に傷を負った人たちは子どもから大人まで幅広くいます。自分の感情をコントロールすることが難しい子どもにとってこの震災は予想を絶するほどの負担になっていると考えました。教師を目指す者として、子どもたちのためにできることはないかと考え、震災ボランティアの参加を希望しました。

【活動概要】

中野小学校での災害支援

(1) 授業中

児童の学習サポーターとしての活動、指導者指示の元での活動

(2) 休み時間

児童の遊び相手、話し相手

(3) 放課後

『杉の子寺子屋』の企画・運営

(4) その他

学校行事サポーター、支援物資分配作業、必要に応じた活動

【活動して思ったこと】

震災から半年以上経過しましたが、震災の爪痕は依然子どもたちに残ったままです。活動を通して、子どもたちはこちらが想像している以上に心に深い傷を負っていると感じました。しかし、子どもたちなりに暗黙の了解として「震災のことを話してはならない」と自分の気持ちを隠しているように思います。子どもたちの抱えた傷跡を少しでも癒すことができるように活動してきましたが、その成果が少しでも出ていれば幸いです。また、この活動は長期的計画でなければ成立しないと感じます。傷が薬を塗っても一瞬で治ることのないように、精神的な負担も一瞬、短い期間で治ることはありません。こちらが焦ることなく、じっくりと長期的計画を考えながらスモールステップを実践していかなければならないと感じました。子どもたちは震災のことを言葉にして「辛い」と言わずとも行動にして表しています。乱暴な行動を取る子、些細なことで喧嘩が始まるということもしょっちゅう見られます。担任に対して暴言を吐いたりする行為も見られました。自分の中に燃える感情を表現するための方法を子どもたちはまだ完全に確立していないと感じます。その子どもたちの想いをきちんと読み取り受け取ることがとても大切になると感じます。

【今後、どう活かしていくか】

3月11日以降、私たちの生活は一変しました。その変化は大きく私たちに押し掛かり精神的な苦痛を与えています。今でも予断を許さない状況にあります。メディアは除々に復興しているという報道をしていますが、変わらない現実があることをきちんと認識していかなければならないと感じます。そして、これから大きな地震が起きないという確証はありません。巨大地震が起きた場合の対処法というものを考えていかなければならないと思います。地震時、ボランティアはどのような行動を取るべきかについても学校側と話し合っていく必要があると感じます。また、今までの活動についてレポート等の記録にまとめ後世に残していく活動も行っていくことが大切になると感じました。そして学校側とボランティア側での話し合いの場を設け徹底的に話し合っていくことが重要となると感じます。

【その他：自由記述欄】

災害支援ボランティアというものは、ボランティア側にも大きな負担をもたらすものだと思います。通常のボランティア活動と同様、身体的・時間的拘束をもたらしますが、精神的拘束が確実に多くなります。震災後すぐの頃には、ボランティアを行うのが「普通」という風潮になりました。ボランティアを行っていない人が「ボランティアをしていないなんておかしい」と非難があびせられたという話を聞いたことがあります。しかし、災害支援ボランティアは特殊なボランティアです。精神に大きく影響するものであり、活動することで逆にこちらが傷を負ったり塞ぎこんだりする可能性があります。そのことにそのことに留意しながらも、活動者自身もまぎれもない被災者であることを忘れずに活動していくことが重要だと感じます。

【まとめ】

災害支援ボランティアを行って来て、私が出たものはとても多かったように思います。子どもたちのためと思って始めた活動が、いつの間にか私自身を救うような形になっていました。子どもたちから得たものを何倍にもして返すことができるように一生懸命活動に取り組んでいこうと思います。活動を通して私たちが子どもたちの人生の手助けをできていければと感じます。

震災の思い出が消え去ることは決してないでしょう。忘れようとしてもそれは叶わぬことだと思います。人々は震災を「禁句」にすることを暗黙の了解としてしまいました。その気持ちは十分に分かるし、私もそうです。しかし、自分の気持ちを抑制してしまうことで自分の心を圧迫し、辛い思いをしてしまうのなら、その気持ちを他人と共有した方が良いと思います。これからも自分のできることを続けていこうと思います。また、今回の「震災復興支援ボランティア報告会」のような機会を設けて頂いたことはボランティア側にとってとてもありがたいことです。関係者の皆様に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。これからも震災ボランティアを頑張っていこうと思います。

ボランティア活動報告書

「古川東中学校ボランティア活動報告書」

大学名 宮城教育大学 学年 1

氏名 菅原 朱莉

【動機】

震災後、校舎が全壊したり、プレハブ校舎で授業をしている学校がたくさんあると聞きました。私は、小さなことでもいいので、被害を受けた学校で何かできることはないかと考えていました。その矢先に、キャリアサポートセンターの前で、ボランティア募集の貼り紙を見つけ、古川東中学校でサマースクールの支援をすることにしました。

【活動概要】

参加学生が、自己紹介した後、中学三年生の生徒たちが2つの教室に分けられました。各教室ごと、自主勉強に取り組む生徒の質問に答えたりと、主に学習の支援を行いました。

活動時間は、休憩を挟み9：30～11：30まででした。

【活動して思ったこと】

事前研修では、プレハブ校舎で授業をしていると聞いていましたが、実際にプレハブ校舎を目の前にして、驚いてしまいました。始めて見たということもあり、仮設住宅のような校舎は、衝撃的でした。

しかし、生徒たちは、それぞれの目標に向かい、頑張っていました。子供の強さを感じました。

個人的な話ですが、お店で私が教えた子に偶然会い、「この前はお世話になりました。」と声をかけられたときは、とても嬉しかったです。心が温かくなりました。

【今後、どう活かしていくか】

このような復興支援活動は、すぐに終わるものではないと思います。これからも、このような活動に積極的に参加していきたいと考えています。教育復興支援として、自分にできることをどんどん見つけて取り組みたいです。

【その他：自由記述欄】

【まとめ】

学習支援だけではなく、震災復興ボランティアは、行ってみないと分からないこともたくさんあると思います。私は、3月に名取市でボランティアをしたことがありましたが、どちらも行ってきて本当に良かったです。小さなことでも、たとえ力になることができなくても、まずは行動をおこすことが大切だと思いました。被災地の人たちと触れ合うことで、気持ちの持ち方も変わるのではないのでしょうか。

ボランティア活動報告書

様式 1

「ボランティア活動（炊き出し・学習支援）を振り返って」

大学名 宮城教育大学 3 学年

氏名 星 知美

【動機】

自分が生まれ育った東北、宮城県でこのような大震災が発生してしまったことに、私自身大きな衝撃を受けていました。何気ない日常生活から一変し、いまだかつて経験したことのない生活が始まり、皆、生きること必死だったことを今でも鮮明に覚えています。私自身の実家のある宮城県北部も最高震度7を観測し、また石巻の親戚の家が津波で流されるといった被害も受けたため、震災から数カ月は身内のことで精一杯で、ボランティアはずっとしたいと思っていたのですが、なかなか活動できずにいました。

そんな中、ずっとやりたいと思っていた炊き出しのボランティアの募集を見つけ、その内容が、実際に被災地に自分たちで作った食べ物を届けることができるということだったので、震災から3カ月経った被災地の人たちの暮らしは今、どのような状況なのかということを知りたいと確かめてみたい。そして、被災地の人たちの生の声を聞きたいという思いから、このボランティアに参加させていただきました。また、学習支援ボランティアに関しても、「ボランティアの質」の変化に伴い、津波で教科書などをすべて流されてしまった受験生等のために、教育大の学生として学習面でのサポートを行いたいと考えたからです。

【活動概要】

① 6月4日（土）、仙台市立郡山中学校PTA会様による避難所（仙台市立六郷中学校）への炊き出し支援協力ボランティアに参加させていただきました。当日は郡山中学校PTAや家庭部の皆さん、教職員の方々と調理室で調理しました。あさりの炊き込みご飯や豚汁、コロケを、仙台市立六郷中学校で生活をする被災者の皆さんへ直接届けました。

② 8月3日（水）、名取市立不二が丘小学校の空き教室を間借りして学校生活を送っていた、同立関上中学校の生徒の学習支援ボランティアに参加させていただきました。

【活動して思ったこと（被災地の現状）】

① 郡山中学校から車で数十分しか走っていないのに、ものすごく遠くまで来たように思わせるくらい被災地の様子に私自身、大きな衝撃を受けました。避難所の出入り口付近の通路には、おそらく支援物資が入っているであろう段ボールが高く積み上げられ、避難所の中は足の踏み場もないほど人々の生活用品で埋め尽くされていたため、圧迫感を覚えました。外には仮設トイレと仮設シャワーが男女それぞれ1つか2つ程度しかなく、人々が列を作っていました。人々の様子としては、知り合い同士で丸くなって話をしている高齢者の姿もありましたが、一人でぼーっとどこかを見つめ、放心状態に近い様子の方もいて、その姿がまさしく今の被災地の現状を物語っているように感じました。

② 学習支援の前に、中学3年生の生徒用のノートの綴じ方をしました。というのも、生徒が

震災前に使っていた教科書やノートがすべて津波で流されてしまったため、復習ができないという現状から、かろうじて津波に流されずに済んだ、去年同校を卒業した生徒の社会のノートをコピーし、全員に配ろうということでした。

学習支援では中学校1、2年生の学習支援を担当しました。生徒は普段と変わらない様子で過ごしていたようでしたが、「今日〇〇君、何で休みだったか知ってる?」「お母さんのお葬式だったみたいだよ」「あ、そうなんだ~」という、普通の学校では到底考えられない会話を、生徒たちはまるで明日の時間割を聞き合う程度の会話のようなやりとりをしていて、大きなショックを受けました。

【今後、どう活かしていくか】

今回参加させていただいたボランティアを通して、たとえ同じ宮城県内であっても、仙台市内であっても、被害の状況がこんなにも異なっていることに驚きました。1000年に一度の大きな大震災を20歳という年齢で経験した以上、それを後世に伝えていく役割・責任があると感じています。ただ「〇〇年前にこういう大震災があった」という事実を伝えるだけでなく、政治面・経済面での混乱、被災地の現状を目の当たりにしてきたからこそ、今度いつ何時起こるか分からない災害に十分備えられるよう、自分が実際に見て聞いて感じた経験を大切にしたいと思います。

【その他：自由記述欄 ☆子どもたちの心のケアについて】

2つのボランティアにも共通することですが、今回の大震災で多くの子どもたちが親族や友だちを亡くすなど、心に大きな傷を負っています。私が今ボランティアとして行っている仙台市中心部の小学校でさえも、震災の恐怖体験から心のケアを必要としている児童がいるほどです。将来教員を目指す身として、この震災による子どもたちのケアをどうしていくのか、今後考えていかなければならない課題だと思っています。

【まとめ】

今回のボランティアを通して、自分たちの目と鼻の先に大きな被害を受けた場所があるのに、こんなにも生活環境が異なっているということに気付くことができました。震災直後から今日まで、全国各地からたくさんの方々が、私たちの住む東北・宮城に駆け付けて来ていますが、そんな宮城県に住む私たちは、もうほぼ完全に震災以前の生活に戻っているにも関わらず、ボランティア活動に参加する人が少ないのではないかと思います。確かに、震災直後は多くの人たちが被害を受け、不自由な生活を強いられました。しかし、震災から7カ月もの月日が経過した今、被災地に対する関心は残念ながら少しずつ薄れてきていることは確かです。だからこそ、あの震災での不自由な生活を経験してきた私たちが、先頭に立って今もなお不自由な生活を送っている被災地の方々を助ける必要があると思います。

これから求められる課題として、「ボランティアの質」が考えられます。被災地に必要なものが、日々変化して生きているからです。それらを被災地に一番近い私たちがいち早く認識すること、そしてより多くの人たちが協力できるような環境作り（駅から被災地へのバス運行を増やすなど）を行うことが今すぐにできることなのではないかと考えます。

被災地の人たちは私たちより何倍もつらいはずなのに快く笑顔で迎えてくれ、むしろ私たちボランティアの方が元気をもらっているような気がします。震災に負けず、強く生きる被災地の方々を、更に支えていけるよう、私たちひとりひとりがボランティアについて考え、積極的に活動していくことが大切だと思いました。

ボランティア活動報告書

「進め！中野小学校」

大学名 宮城教育大学 学年 1年
氏名 星 尚仁

【動機】

大学に合格したものの、すぐに東日本大震災が起きた。何かできることをしなくてはと思う一方で、大学の入学手続き関連の書類の整理などに追われる日々が続き、なかなか踏み出せずにいた。大学入学後も大学生生活の流れがよく分からず、ボランティアに参加することができなかった。授業がびっしりと入っているのにどうやって平日の昼間に行けばいいのだろうとってしまうほどだった。夏休みになりようやく時間的余裕ができたため、参加を決意した。

【活動概要】

仙台市立中野小学校（仙台市立中野栄小学校を間借り中）

教員補助

学習支援

遊び相手

寺子屋の運営

杉の子発表会（学習発表会）の手伝い

【活動して思ったこと】

中野小学校の子どもたちは活気に満ち溢れていた。中野栄小学校での学校生活にもすっかり慣れ親しんだ様子で、放課後のクラブ活動も中野栄小学校の子どもたちと一緒にしていた。不自由はないように思われるが、多くの行事が変更・中止になっており、やはり例年通りとはいかないようだ。そんな状況下において催された杉の子発表会では子どもたちの一生懸命な姿に涙する人もいた。ボランティアとして杉の子発表会に参加した私にも胸に熱い何かがかみ上げてきた。ボランティアとしてではなく、1人の観客として子どもたちの秘める力を魅せられた瞬間だった。3月11日の出来事を乗り越え、負けずに進んでいこうという思いがそこにはあった。普段の練習では悪ふざけが過ぎる子どもも真剣な表情で取り組んでいた。いつの日か中野小学校の体育館で「学芸会」として開催できる日をととても楽しみに思いながら子どもたちと関わっていこうと思った。

【今後、どう活かしていくか】

ボランティアを始めて数回のうちは自分の無力さを痛感した。右も左も分からないとは、まさにこのことだと思った。子どもたちへの接し方・注意の仕方など分からないことだらけだった。こんなことでボランティアと言えるのだろうかとも思った。大学の授業の一環としては小学校に行ったことはなかったので緊張もした。しかし、中野小学校の子どもたちは私を「先生」と呼んでくれた。力のない大学生でも小学生の子どもたちからすれば、私たちは先生なのだと思った。その出来事が自信に繋がった。自分に自信と誇りを持って子どもたちに接していくことが、子どもたちを不安にさせないという意味でも大事だと思った。今後もこのことを念頭において活動していきたい。

学習支援をしているとき、5年生に分数の計算の仕方を教える場面があった。その中で、私は約分を習っていない5年生に対し、約分を教えてしまいそうになった。授業の進度を予め把握したうえで学習支援を行っていくことが必要だと思ったので、注意しながら進めていきたい。

ボランティアをするにあたって困ったことは、事前に得られる情報が思ったよりも少ないということである。どれくらいの規模なのか、必要なものは何なのかといったことである。これは他の小学校に単発でボランティアに行ったときにも気になったことである。情報が来るのを待つのではなく、自ら情報を手に入れて、必要なものを揃え準備していくことによってボランティア活動を互いにもっと有意義なものにできると思った。

【その他：自由記述欄】

地震発生時の仙台駅前では百貨店の壁が剥がれ落ちるなどの被害が発生し、中央分離帯に避難する歩行者も多くいた。自動車展示場のショーウィンドウのガラスが割れているところもあった。異常気象とも思える雪の降りしきる中、すぐさま帰宅し小学校に弟を迎えに行く。と体育館には親の迎えを待つ大勢の小学生がいた。普段から行っている引き渡し訓練が実践されている場であった。その小学校の被害では天井が落下するなどの被害が出ていた。しかし、防災ずきんを身につけている小学生は見当たらなかった。私は小学1年生までは千葉県市川市の公立の小学校に通っていたが、そこでは防災ずきんを使用していた。防災ずきんとは地震・火災などの災害発生時に頭部を保護するための防具である。普段は椅子の上に敷いて座布団の代わりとして使用していた。避難訓練などの際には防災ずきんをかぶって避難した。来るべき災害に備えて率先して防災ずきんを導入してもいいのではないだろうか。

【まとめ】

私たち学生ができることは、地道かつ継続的な支援活動だと思う。1人の学生が子どもたちと接する時間は1週間当たり3時間程度しかないが、焦らずにじっくりと活動していきたい。この支援活動は1年や2年で終わるものではなく、中長期的な活動になると思うので、できれば卒業時まで続けていきたい。数年後に大震災のことが忘れられてしまうようなことがあっても、現在のボランティアの人数を維持することも大事だと思う。「地震のことが忘れられてしまったから、ボランティアの先生はいなくなってしまったんだ！」そんな風に思われてしまっはいけない。何よりも中野小学校の子どもたちがかわいそうだと思う。大学側にも今後数年はそうした活動への呼びかけ・補助などをしてもらいたいと思う。私たちは学生なので、授業を優先せざるを得ない。大学側が率先してボランティア活動を推進していくことは間違いなく今後も必要だろう。

最後になりますが、全国からの多大なるご支援ありがとうございました。一学生として微力ではありますが、これからも支援活動を続けていきたいと思っております。

ボランティア活動報告書

「タイトル 学習支援ボランティアのまとめ」

大学名宮城教育大学 学年 1年
氏名 石郷岡 千晶

【動機】

『教育の制度』という授業でボランティア活動をするように強く勧められ、せっかくの夏休みなのでボランティアを体験したいと思ったため。

【活動概要】

主に数学の授業中に問題の答え合わせや、授業についていけない子のサポートをしました。

【活動して思ったこと】

生徒の様子は、普通のように感じました。ただ、数学に関して前の単元を理解できていない子が多く、授業が早く進んだのかなと思いました。

【今後、どう活かしていくか】

今回授業のサポートに入って、様々な生徒の様子を見て、教師が知らないところで指示の通りに作業ができていなかったり、躓いたまま質問できなかったりする生徒が意外といるのだということがわかりました。これから様々な実習やボランティアに参加する際には気を付けようと思いました。

【その他：自由記述欄】

沿岸から内陸地域へ転校した生徒への学習支援も必要だと思いました。塾に通わせたり、家庭教師を雇ったりするのは、お金がかかることなので、被災した方にとってはボランティアで勉強を教えるのは、助かるのではないかなと思います。

【まとめ】

貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。機会があれば、また積極的に参加させていただきます。

ボランティア活動報告書

「中野小学校学習支援ボランティア活動報告書」

大学名 宮城教育大学 学年 3年
氏名 中村 沙也香

【動機】

以前からボランティア活動をしたいと考えていたが、震災後にボランティア活動をするなら今だと考えていたところに、大学のコースの先輩から今度ボランティアチームを立ち上げるから参加しないかと誘われたことが、このボランティアへ参加したきっかけである。私は将来教師になりたいと考えており、そのためにも現場で子どもたちとかかわり教師の仕事についても学ぶことができ、支援する側とされる側のどちらにも利益があるこのボランティアはとても魅力的だった。

【活動概要】

中野小学校が校舎を借りている中野栄小学校で、授業中の学習支援や放課後に子どもたちと遊んだり宿題をみたりということを中心に活動している。普通学級だけでなく、特別学級でも学習支援をしており、特別学級は中野小と中野栄小の両校に支援に入っている。また、授業参観や学習発表会などの行事でも、教師がいない間クラスをまとめたり、教師の手伝いをしたりしている。

【活動して思ったこと】

このボランティアを始めたのは今年の5月だったが、8月には附属小学校で教育実習を行い、学校によって子どもたちの特徴も様々であることがわかった。中野小の子どもたちはとにかく元気で、ボランティアとして行っている私の方が子どもに元気をもらうことが多かった。しかし、元気に見える子どもたちでも震災に関係した話が出ると、妙に落ち着きがなくなる子がいたり、大声で騒ぐ子がいたりした。また、校外学習の話が出たときは、家庭によって参加できる子とできない子がいて、参加できない子はやはり寂しそうな様子で、こういうときに子どもになんて声をかければよいのかわからない自分が不甲斐ないと思ったと同時に、これからもっと子どもたちとかかわってたくさんを知り、子どもに寄り添っていけたらいいと思った。

【今後、どう活かしていくか】

私は、大学卒業後は宮城県内で小学校の教師として働きたいと考えている。地域は仙台市内に限定するのではなく、宮城県全体での受験を考えているので、もしかしたら中野小のように津波の被害にあった学校に配属になることもあるだろう。そうしたときに、少しでも子どもたちや学校の職員の方、地域の方の立場になって物事を考え、行動できるようになりたいと考えている。また、ボランティアとはいえ実際の小学校に教師として入り、子どもたちや職員の方々とかかわることで得た知識を、今度は本物の教師として生かしていきたいと思う。教材研究でも、実際の子どもを見てその実態から、今までよりも現代の子どもに授業づくりをしていきたい。

【その他：自由記述欄】

中野小の教頭先生がとても教育に熱い心を持ったかたで、初めて学習支援をしに行ったときに支援を受ける側だけでなく、支援に来る学生にも何か掴んでもらえるような、双方に利益のあるボランティアにしていきたいと言ってらっしゃったのがとても印象に残っている。教頭先生のおっしゃったとおり、この活動を通して私も様々なことを学ぶことができた。教室整備や授業以外のことなど、教師の仕事は多岐にわたっていて、責任もとても大きい。しかし、その分やりがいも大きいということも知ることができた。中野小の学習支援ボランティアは、私にとってとても貴重な体験となった。

【まとめ】

今回、今までのボランティア活動を振り返ってみてどんなことを知ることができたのか、逆にどんな改善点があるのかが見えてきた。なので、その反省を活かし、今後は以前よりも積極的に子どもとかかわるようにし、クラスの子一人ひとりに気を配りつつ、クラス全体も見られるような余裕ができるようにしたい。そして、子どもから元気をもらうだけでなく、子どもに元気を与えられるようにもしたい。また、始まったばかりの寺子屋の活動をもっと活発にし、自分の専門である理科の知識も活かしながら、子どもたちに学ぶことの楽しさを知ってもらい、なおかつ学習の習慣づけができれば良いと思う。

ボランティア活動報告書

- ・各人が PC で作成する。
 - ・枚数は A 4 判 2 枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

「関上中学校でのボランティア」

大学名 宮城教育大学 学年 2年
氏名 渡邊 佳純

【動機】

自分も、津波の被害にあった子供たちに少しでも寄り添って助けたいと思った。

【活動概要】

中学生の学習指導

【活動して思ったこと】

震災後のショックを引きずっている様子を見せず、集中して課題に取り組んでいるように見えたことから、気持ちを強く持った素晴らしい生徒たちだなと思った。
しかし、担当していただいた先生のお話では、生徒たちが受けたショックは小さいものではないと聞き、我慢していることもたくさんあるのかなと思った。

【今後、どう活かしていくか】

生徒が質問を気軽にできるようにするために、たまに声をかけてみるのも効果的だと思ったので、これからの機会でも実践していきたい。

【その他：自由記述欄】

【まとめ】

現地に実際に行くことで、自分自身学んだことやわかったことがあった。「百聞は一見にしかず」とあるように、このボランティアの経験で学んだものは価値があると思う。

ボランティア活動報告書

「中野小学校でのボランティア活動を通して学んだこと」

大学名 宮城教育大学 学年 4年

氏名 藤田 美穂

【動機】

震災が発生した時、私は山形県の実家に帰省中だった。テレビを通して被災地の状況を知り、何か私も支援をしたいと思っていた。しかし、何をすればよいかわからず、行動できずにいた。

そんな時に、大学から小学校での支援ボランティア募集のメールが届き、自分の勉強にもなるし、被災した小学生たちの支援もできる活動だと感じ、この活動に参加したいと思った。

【活動概要】

各学級の授業の支援や、放課後の寺子屋活動、学習発表会の準備など先生方のお手伝いといった活動をした。

授業の支援では、特別支援学級に入って自立活動と一緒に活動した。

寺子屋では、子どもたちに宿題をさせたり、話し相手になったりした。

学習発表会の準備では、背景画を描いたり、当日の準備や後片付けをしたりした。

【活動して思ったこと】

小学校に行く前は、震災を体験した子どもたちは辛い気持ちでいっぱい、私にできることなどないのでは、と思っていた。しかし、実際に子どもたちに会ってみると、もちろん辛い気持はあるだろうが、それでも元気いっぱいに学校生活を送っていた。それを見て、私も子どもたちが楽しく学校生活を送れるようにサポートしていこうと思った。

私は教育実習以外で学校現場に入って活動するのは初めてだったので、先生方の授業や子どもたちとの接し方を見ることができ、学校での先生方の仕事の様子を知ることができた。

また、子どもたちの日頃の様子を知り、学校生活の中で子どもたちがどんなことを感じているのかを、まだ少しだが感じることもできた。

子どもたちと接する中で、まだまだ子どもたちと打ち解けられておらず、他の方々のように子どもと話したりできていないので、これからもっと頑張っていかなければならないと思っている。

【今後、どう活かしていくか】

私は来年から教壇に立たせていただくことが決まっているので、先生方の指導の様子を今後もたくさん見て、子どもたちとの接し方や指導のしかたを学んでいきたい。また、子どもたちの様子をよく見て、自分が子どもたちにできることは何なのかを考え、実行していきたい。特に、子どもたちに注意しなければならない場面でそれがしっかりとできるよう、日頃から意識していきたい。

また、子どもたちと親しくなったり、コミュニケーションをとったりしていくために、自分から積極的に話しかけたりすることや、時間があるときには一緒に遊んだりすることをしていきたい。

1日1日の活動を大切にして、子どもたちが楽しく学校生活を送れるようにするために、そして自分自身の勉強のためにも、私ができることをしっかりやっていきたい。

【その他：自由記述欄】

この震災ボランティアは、子どもたちのためにも、学校の先生たちのためにも大切な活動だと思う。まだまだ復興にも時間がかかるし、今後もたくさんの学生に参加を募って活動して行ってほしいと思う。

【まとめ】

中野小学校でのボランティア活動を通して、私は本当にたくさんのことを学んでいるし、子どもたちのためにも微力だが力になれているのではないかと考えている。これからも、子どもたちの笑顔のために、私ができることを精一杯やっていきたい。

また、同じ活動をしている仲間がいるというのは本当に心強いし、仲間がたくさんいることでより内容の濃い活動ができていると思う。なので、個人としてだけでなく、中野小ボランティアチームの一員としても、今後の活動をよりよいものにしていくためにできることをしていきたいと思う。

ボランティア活動報告書

「被災学校支援ボランティアを通して」

大学名 宮城教育大学 学年 3年
氏名 畠山 結衣

【動機】

震災後、秋田にある実家に帰省したが、テレビに映る被災地の状況とかけ離れていることに戸惑う毎日だった。食事にも、風呂にも、寝るところにも困らない、自分はこんなに呑気に毎日を過ごしているのだろうかと思ひ悩み日が続く、何もできない自分にもどかしさを感じていた。そんな中、石巻支援学校のボランティア募集の連絡が入り、自分が何かの力になれるのならばという思いで参加することにした。

大塩小学校、鳴瀬第二中学校についても、津波の被害が大きかったという松島地域の募集で、以前訪れたことがある土地でもあることから、少しでも力になればという思いで参加することを決めた。

【活動概要】

石巻支援学校

- ・学習支援、食事準備、洗濯、清掃

大塩小学校、鳴瀬第二中学校

- ・学習支援

【活動して思ったこと】

テレビで被災地の状況が毎日のように流れていてその状況をテレビで見ているはずだが、やはり実際に自分の目でみると本当に信じられないような光景が広がっていた。だが、そんな状況の中でも、石巻支援学校に避難していた方々は明るく元気に振舞っていて、ボランティアにいった私のほうが逆に励まされた。しかし、やはり生活状況は厳しく、食事は回ってくるが、同じようなメニューであるし、暖房器具も数に限りがあるため朝や夜はとても冷える。お風呂も毎日に入るとができないし、部屋も共同で使うため少なからず他の人に気を使う状況だった。明るく振舞う一方で、相当なストレスを感じていたのではないかと思う。支援がされていないわけではないが、もう少しでも支援の質が上げればよいと感じた。

大塩小学校、鳴瀬第二中学校では、学習会での学習支援を行った。東松島も大きな被害があった場所だが、子どもたちはとても元気で、勉強にも真剣に取り組んでいた。この時、児童・生徒が使用していた夏休みの宿題のドリルは寄付されたものらしく、全国から被災地へ様々な支援がなされているのだということを知った。だが、気になったのは子どもたちのストレスで、表面には出ていないだけで、いろいろなことを感じているのではないかと思った。

適切なケアがされればよいなと感じた。

【今後、どう活かしていくか】

このボランティアを通して、人の強さということを感じた。どんな状況に置かれても、前向きに笑顔でいられることはとてもすごいことだと思う。私も被災地の人たちのような、強い心の持ち主になりたいと思った。また、これから教員を目指す身として、児童・生徒がこういう状況に置かれたときに教師としてどのような対応をしていけばよいのか考えるきっかけとなった。これから関わっていきだる子どもたちは、多くが震災を経験した子どもたちだろうし、これからももしかしたら今回のようなことが起きるかもしれない。こうすればいいという答えはまだ自分の中で出すことができないが、教師としてどう関わっていけばよいかこれからも考えていきたい。

【その他：自由記述欄】

震災から、半年以上経ったが未だ復興ができていない地域も多くあると思う。支援が必要な地域に関しては、これからも積極的に力になっていきたいし、今だけでなく長期的な支援がなされるようにしてほしい。

【まとめ】

今回の震災では様々なことを感じ、考えることが多かった。そんな中でのボランティアは自分の中でとても大きな経験となった。このボランティアで経験したこと、感じたことはこれからも大切にしていきたい。震災から時間が経ち、だんだんと人々の関心が薄れていっているが、まだ辛い状況にある人たちがいるのだということを忘れないようにしたいし、他の人にも忘れないでほしい。これからも、直接的ではないとしても何らかの形で力になっていきたいと思う。

ボランティア活動報告書

「 助け手として 」

大学名	宮城教育大学	3 学年
氏 名	福士 亮	

【動機】

東日本大震災の被害状況をさまざまなメディアを通して知るなかで、ことの深刻さを感じた。多くの友人が沿岸部に住んでいることもあり、自らの手で何か手助けできることはないかと思い立った。友人たちの衣食住が不十分な状況を把握し、沿岸部の人々も同様な思いと状況に面していることにじっとしていられなかったのが動機である。

また、NPO 法人から支援の要請があり、自分の住んでいる地域周辺に避難所がたくさんあることでさらに、地域住民の支援をしたいと思ったため。

【活動概要】

多賀城市の下馬を拠点にし、その周辺の桜木や大代、七ヶ浜の地域住民の家屋の掃除やがれきの撤去。また、海外や他県からの支援物資の運搬や整理と分配。そして炊き出しなどである。(ホープミヤギ)

また、地域の避難所の夜の見回り。具体的には体育館の警備と高齢者の歩行のサポート、配給される食事の準備と配給。暖房器具の整備と維持の諸作業。(NPO 法人 Life&Desire)

【活動して思ったこと】

一番思ったことは、被害の大きさである。テレビで見る場面もすごい津波の被害であると感じたが、自分の目でその場に出向き一軒一軒の片付けの手伝いをする中で被害の大きさを肌で感じた。その場に行かなければ分からないことはたくさんあった。特に感じたのは匂いだった。下水道の機能が停止し、異臭が地域周辺を覆っていた。

さらに被害の大きさを感じたことで自分の小ささを感じた。本当に小さい作業の手伝いしかできないこと。汚れた缶ジュースを水洗いするだけの1日があったり、台所の皿を取り出したりすることしかできない自分を感じた。もっと大規模な支援ができるのではないかと望んでいた自分との落差を感じたと共に中長期的支援の重要性を身をもって理解することができた。

【今後、どう活かしていくか】

活動を通して思ったことから、一人の力ではどうすることもできないことを学び、コミュニケーションの輪を広げていくことが大切だと感じた。日本のさまざまな地域の人や世界各国の人々とコミュニケーションととっていくことで相互理解が生まれ、助け合っていく。このことをこの出来事を通して、強めていくべき課題ではないかと思った。政府の力だけでは限りがあり、個々のつながりがいちばん身近であり励まし合える関係を築け、それこそが何事に対しても迅速かつ信頼性のある活動支援や復興が行えるように思える。

つまり、私自身としては、多くの人々とのコミュニケーションのつながりを広げていくことが大切と感じ、意識的にそのような姿勢で生活をしていくこと、また中長期的な支援のサポートを続けていきたいと思った。

【その他：自由記述欄】

ホープミヤギ (Hope Miyagi)

http://www.hopemiyagi.org/HopeMiyagi/My_Albums/peji/4_23madeno_xie_zhen.html#58

NPO 法人 Life&Desire Sendai

<http://blog.canpan.info/fukkou/archive/68>

【まとめ】

今回の東日本大震災の復興支援ボランティア活動を通してたくさんを経験し、感じ、学んだ。その中で、活動するにあたっての活動量や日程などについても無理に活動していかないことの重要性も学んだ。それは予想していなかった学びであった。本来支援としてこちら側が支えるべき役割であったが、助けられ励まされ学ばされることが多かった。地域住民の方々や沿岸部に住んでいる方々はもちろん他の県や国から来る手紙や支援の手、また彼らとともに共感し合い励まし合ったことが得られた点であった。この震災を通して今まで関わりのなかった方々ともコミュニケーションの機会が与えられた。

多くのことを感じさせられたボランティア活動だった。

ボランティア活動報告書

- ・各人が PC で作成する。
- ・枚数は A 4 判 2 枚、内容に次の⑥項目を盛り込む
- ①動機、②活動概要、③活動して思ったこと、④今後、どう活かしていくか、⑤その他（自由記述）⑥まとめ
- ・写真や図の挿入を含んでレイアウト自由とする。

「荒浜小学校の震災復興ボランティアに参加して」

大学名 宮城教育大学 学年 1
氏名 峯田清人

【動機】

私は震災が起きた当時、すでに宮城教育大学に入学が決まっていた、4年間の生活拠点となる宮城県で何か役に立ちたいと思い、入学する前から震災復興のボランティアに参加したいと思っていました。荒浜小学校でボランティアをしようと決めたのは、掲示板の募集を見たのがきっかけです。

【活動概要】

主な活動は、昼休みの遊び相手です。9月には荒浜小学校の運動会の運営のお手伝いをしました。10月には6学年のPTA行事に参加させていただき、大学で学んでいることを活かし、指導やお手伝いをしました。

【活動して思ったこと】

私がこのボランティア活動に参加して、被災地の状況や子どもたちの様子は、実際に関わってみないとわからないものなのだなと思いました。ボランティア活動をする前から、メディアなどが毎日のように報道するのを見ていたが、実際に子どもたちと接してみると印象が大きく違っていました。また、荒浜小学校には日本国内をはじめ、外国など様々なところから支援物資や激励の贈り物が届いています。先生方にそのことについて伺うと、支援物資は役に立つものもあるが、そうでないものも多いとおっしゃっていました。つまり、何かしてあげたいという気持ちだけで被災地の現状を分かっていないためにこのようなことが生じてしまうのだと思いました。

【今後、どう活かしていくか】

悲惨な現状に向き合っている子どもたちや先生方と関わって、自分自身学ぶことがたくさんありました。そして、震災復興ボランティアは長期的に行うべきだと考えました。約半年携わってきて、子どもたちとの信頼関係も築いてきたので、たくさん話をする中で、心のケアのようなものもしていけたらいいなと思っています。

【その他：自由記述欄】

この復興支援のボランティアに参加して、大地震がもたらした深い爪痕を目の当たりにしました。私はこの経験をより多くの人に伝えていきたいと考えています。また、私の周りには、ボランティアサークルに入って活動している人はいますが、震災復興のボランティアに参加している人は少ないように見受けられます。1 ページ目にも書いたように、私たちは被災地の現状を知らな過ぎると思います。様々な人の手が加わり、日々刻々と状況は変化しています。その変化を実際に関わりながら感じ、それに応じた支援を行っていくべきだと思います。

【まとめ】

既に行ったように、このようなボランティアは一時的なものではなく、長期的に行っていくべきだと考えているので、これからも時間の許す限り、継続していきたいと思っています。



ボランティア活動報告書

「中野小学校でのボランティア活動報告」

大学名 宮城教育大学 学年 3年
氏 名 嶺岸 香菜

【動機】

今年に入り、震災関係のボランティア活動を一回したことがあったが、他のボランティア活動はしたことがなかった。3学年になり、子どもに関わりのあるボランティア活動をしたと思っていたときに、同じコースの先輩からこの中野小学校でのボランティア活動の計画を聞き、ぜひ参加したいと思ったことがきっかけである。

【活動概要】

私は主に午後の時間帯のボランティア活動をしてきた。午後の授業の学習支援に入った、放課後に児童たちの話し相手や遊び相手になったり、放課後の学習を支援したりすることが主な活動内容であった。中でも、今までの活動では児童たちの放課後の話し相手や遊び相手になる活動が一番多かったと思う。学習支援においては、図工や調べ学習の際に多く支援に入ることができた。

【活動して思ったこと】

子どもたちは普段は明るく元気でも、ふとした会話から震災について触れてしまうことがあり、子どもたちとの会話では少し言葉を選んで話すことが難しかった。また、同じ小学生でも1年生と6年生とでは考え方や話す様子がまったく異なっており、小学校に在籍する子どもたちの幅広さを感じた。学年ごとに子どもたちの雰囲気も大きく異なってくるので、学年や子どもたちの様子にあった対応を求められると思った。

【今後、どう活かしていくか】

それぞれの学年や子どもたちに合った対応の仕方ができるようにしたいと思う。このボランティア活動では、小学校という場所に在籍する子どもたちの年齢の幅広さを感じた。また、個人個人でもまったく異なる子どもたちの様子から、一人ひとりに対して合った対応ができるように今後活かしていきたいと思う。

【その他：自由記述欄】

私は今まで小学生の子どもとあまり接する機会がなかったので、ボランティア活動を始めて最初のときはどのように接したらよいのか少し不安であった。しかし、笑顔で接することを心掛けてボランティア活動を始め、今では自然に子どもたちと接することができるようになったと思う。

【まとめ】

今年度からこの中野小学校へのボランティア活動に参加し、子どもたちと接する難しさを感じたが、これからもこの半年間の経験を活かしながら活動を継続していきたいと思う。半年間の反省を活かし、これからの活動をよりよいものにしていくために努力していきたい。小学校という幅広い年齢の子どもたちがいるなかで、その年齢や、その子ども一人ひとりに合った対応が今後、よりできるようになっていきたい。

ボランティア活動報告書

「中野小に行って」

大学名宮城教育大学 学年 1
氏名 鈴木 将也

【動機】

なるべく早い時期にボランティアをしたいと思い参加しました。また、小学生と関わることによって私自身が成長できると考えました。時期的にも夏休みということもあり、この時間を活用したいと思いました。

【活動概要】

- ・ 学習支援
- ・ 寺子屋
- ・ 遊び相手

【活動して思ったこと】

教室に入り、担任の先生に仕事を与えられればいいのですが、そうでない場合に困りました。自分で考えて動く必要があるのはわかっています。しかし、先生の授業を邪魔しないように、とかなるべく大きな声を出さずに、などと考えるとなかなか行動に移せませんでした。児童にどう言えばおとなしくなるのか、授業に注意を戻せるのか、など考えなければならぬことがいろいろあります。また、学習支援をする際に、児童の知らない言葉を使ってしまったりすることがありました。授業の進度を把握して、児童はどこまで知っているのかを考えながら教えていきたいと思います。

これは仕方のないことですが、授業中に校舎を直すドリルのような音が非常にうるさかったです。これでは児童も大変だろうなと思いました。地震の影響はこのように今でもいたるところに見られました。

寺子屋は人が来てくれたことがほとんどありませんでした。寺子屋は楽しいものだと思ってもらえるようなものにしたいです。

遊び相手は児童と楽しくできたと思います。ただ、絶対に児童にけがをさせてはいけませんので、その注意を忘れないでやってきたいと思います。

【今後、どう活かしていくか】

今まで授業に入って思ったことは、児童には自分からどんどん関わっていかねばいけないということです。わからないから教えて、と自分から言う子はほとんどいません。こちらは教室全体を見渡せるので、わからなそうにしている子を見つけて、こちらから声をかけていきたいと思います。他にも、掃除の時間にもこちらから動いて児童の見本になったりできればいいと思います。

学習支援をよりよいものにするために、教科書に目を通しておくことが必要だと思いました。言葉づかいを教科書に近いものにすることで児童も理解しやすくなるでしょう。宮教大の図書館に教科書が置いてあるので、それを活用していこうと思います。

これは、最も大切だと思うのですが、自分で考えてどんどん動くようにしたいです。先生の指示をいちいち待っているのでは先生にも負担になりかねません。先生の目が届かないところをこちらで補助することができれば理想的だと思います。間違ったことをすることもあると思いますが、必要だと思ったことはどんどん実行していきたいです。

寺子屋はまだまだ認知度が低いのではないかと思います。無理に来てもらう必要はないと思いますが、児童の学習時間の確保という面で寺子屋は有効です。児童にもっと活用してもらいたいです。寺子屋の認知度を上げるために、児童に寺子屋を勧めていきたいと思いません。

【その他：自由記述欄】

私は九月からボランティアに参加しましたが、よい経験になっていると思います。ボランティアに参加する前よりも、大学の授業に積極的になり、ボランティアに活かさないかと考えるようになりました。また、教育現場を実際に見ることで自分の思っていたこととは違う様子などもありました。教師になるのも大変ですが、教師になってからも大変のようです。これはわかっていたことですが、実際に現場を見て改めて実感しました。このボランティア活動は間違いなく自分の為になっています。このやりがいのある活動をずっと続けていきたいです。

【まとめ】

- 学習支援をする際に、もっと積極的にしていく。
- 小学校で学ぶ内容、進度についての知識をふやす。
- 寺子屋を活用してもらう。
- ボランティアは自分の為になる

資 料



教員養成大学としての 教育復興支援

国立大学法人
宮城教育大学
研究・連携推進課長 芳賀 茂

はじめに

平成23年7月1日
朝日新聞 朝刊 33面



1. 宮城県の被災状況

- 亡くなられた方 (11月8日現在)
9,500人
- 行方の分からない方 (11月8日現在)
2,006人
- 学校の施設被害(10月20日現在;県教委)
882校中759校

沿岸部を中心に生活拠点が壊滅的に破壊
劣悪な教育環境での1月遅れの学校再開

2. 宮教大の被害状況

- 学生・院生・園児・児童・生徒及び教職員
 - 軽傷者がでたが、死亡者は「0」
 - 家族の死亡や不明、家屋の全壊・半壊等が
「500人」を超える
- 建物の被害
 - 震度「6」を超える2度の地震のわりに、
近隣の大学と比較して軽微

3. 宮教大の対応 ①

- 大学の復興
 - ・ 「災害対策本部」の設置
後に「教育復興対策本部」に切り替え
- 措置内容
 - ・ 学生、教職員等の安否確認・被害状況の調査
 - ・ 学内の被災状況の調査
 - ・ 入試対応と学事日程の調整・決定
 - ・ 被災学生への支援
授業料等の免除枠拡大、相談窓口の開設、
募金活動の開始、学生ボランティアへの経済支援

3. 宮教大の対応 ②

- 宮城・仙台未来づくりプロジェクト
 - ・ 支援窓口の一本化、被災状況・支援ニーズの調査
 - ・ 救済物資・文具等の中継
 - ・ 緊急的な学生ボランティアの派遣
(石巻支援学校、仙台市内の被災校)
- 教育復興支援センター
 - ・ 中・長期的な教育復興支援
 - ・ 6つの支援プログラムを提供
 - ・ 県教委・市教委との連携と調整

4. 宮教大生の震災当初の活動

- 自発的なボランティア活動（震災直後から）
報告があったものだけで 約230件
↓
土壌：日頃からの学校支援への経験
- 大学が関与したボランティア活動（4月頃から）
 - ・ 石巻支援学校への支援 約30名と教員
↓
物資支援活動の中での支援ニーズの把握
 - ・ 仙台市沿岸部への支援 6つの小・中学校へ
↓
仙台市教育委員会との連携・調整

5. 教育復興支援センター ①

- 設置：平成23年6月28日
- 目的
宮城県の教育の復興に向け、重点的に取り組む事項
等を明確にし、県内の児童生徒の確かな学力の定着・
向上及び現職教員の支援を中長期的視点に立ち実施
- 部門：研究開発部門と支援実践部門
両部門の往還による適確な支援プログラムの提供
- 関係機関との連携による広域的支援
宮城県教育委員会及び仙台市教育委員会等との連携
のもと、県内の大学及び全国教員養成系大学・学部との
連携・協働しながらの支援

5. 教育復興支援センター ②

○ 現在の提供支援プログラム

- ① 教育復興支援塾事業
- ② 教員補助事業
- ③ 教員研修等事業
- ④ 子ども対象・参加イベント事業
- ⑤ 心のケア支援事業
- ⑥ こころざし・キャリア教育事業

「センターができたから…」ということではなく、センターという“組織”として、さらに積極的に動けるように!!

「被災地に行けばいい」というわけではなく、その地域でどんな支援が望まれているのか!! (実態の把握ととも適切な支援の在り方の検討)

6. 夏休み期間中の活動 ①

- 支援件数:36件 (7月21日～9月30日)

支援内容

支援内容	ニーズ(実施)件数
補習学習の実施	3
自学自習等への支援	25
教員補助	5
イベント等の補助	3

- 支援ボランティア数 : 延べ1,190人、実人数445人
- 他大学からの支援
 東北大学 5 仙台大学 9 東北福祉大学 6 愛知教育大学 14
 大阪教育大学 31 京都教育大学 5 群馬大学 13
 奈良教育大学 14 福岡教育大学 5 北海道教育大学 12
 滋賀大学 6 (計 120人)

6. 夏休み期間中の活動 ②

- 宿泊
 近隣への支援 : 学内合宿所及び臨時宿泊所
 (他大学生)
- 遠方への支援 : 支援先の近くの旅館等
 移動
 公共交通機関、タクシー、借り上げバス 等
- 事前研修
 各週ごとに1時間程度で実施
 (講話・連絡事項・派遣先
 学校ごとの個別打ち合わせ)
- リーダー; 連絡体制を簡潔に
- 日誌; 振り返り、記録等



6. 夏休み期間中の活動 ③

- 学生の日誌等より ①
 ○ 群馬大学のBさん(女川町地区) 初日の感想から
 子供たちは、とても元気で明るかったです。先生方も、一生懸命に指導なさってました。笑顔が授業中はとも多かったです。一日目として、学生達は、学校に入る直前に見た町の姿とまるで反対の子供たちの明るさに、安心したとの声がありました。また、学力差(震災の影響というわけではなく、どこにでもある学力差)や子供たちへの休み時間での距離感についてという二等を学習支援終了後に、宮教大の教職大学院の先生を含め、反省会で話し合いました。一日目より二日目の支援がよくなるようにしたいと思います。



6. 夏休み期間中の活動 ④

- 学生の日誌等より ②
- 宮教大のGさん(東松島市地区)の最終日の日誌から
4日間の学習を通して、集中する場面と休む場面のリズムを作って勉強する形が生徒の中にできてきました。これを残りの夏休みの期間に継続して欲しいと思います。4日間とも3学年合わせて100人くらいが集まり、課題に取り組んでいて、矢本一中の生徒の学習意欲の高さを感じました。こうした中で学習支援を行うことができ、私たちにとても良い経験になったと思います。何がどのくらいできるか分からないうままスタートしましたが、毎日充実して活動できて良かったです。



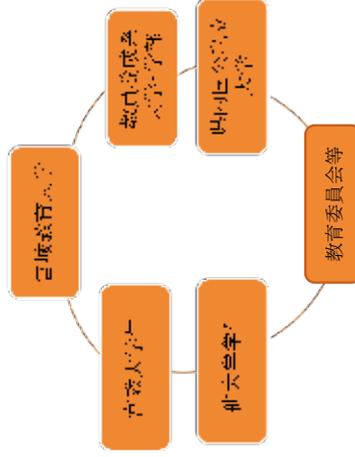
8. 今後

- 冬休み期間中(12月末・1月始め)
学習支援事業
- 春休み期間中(2月～3月)
学習支援事業・教員補助事業
- 大学の授業期間中
教員補助事業(近隣地区が主体)
- 教員研修等事業、子ども対象・参加イベント事業
心のケア支援事業、ころざし・キャリア教育事業
ニーズに応じて適宜実施
- 次年度以降
今年を検証のうえ、早期に支援概要を提示

7. 課題

- 定型的な実施・・・事前に支援期間の設定等
- 事前・事後研修の充実・・・支援ボランティアガイドの作成
- 支援プログラムの最適化・・・研究開発部門の早期立ち上げ
- 学生派遣の環境整備・・・
授業との関係(大学全体の共通理解・ボランティア週間)
- コーディネーターの配置等運営面の強化・・・
学校現場をよく理解しているコーディネーターの配置
- 学校現場での評価と検証・・・教育委員会等との緊密な関係
- 未来への伝承・・・
大学として、神戸波路の教訓が生かされていないかった
今回の内容を関係機関に提供(活字として)

最後に!!! 息の長い・ニーズに応じた適確な教育支援



協働による支援をよろしく願っています。

平成 23 年度 学生ボランティア活用計画

1 ねらい

中野小学校

○震災後の特殊な生活環境下にある児童一人ひとりの実態に応じ、より細やかに対応できる指導・支援体制の構築を図る。

ボランティア

○教職員の指導のもと、児童の学習及び生活面での支援活動を体験することにより、児童理解や学校教育現場での課題とその解決に向けた手立て等に関する見識を深める。

2 ボランティア活動の内容

(1) 授業中

・児童の学習サポーターとしての活動 ・その他、指導者の指示のもとでの活動

(2) 休み時間

・児童の遊び相手、話し相手としての活動

(3) 放課後

・『杉の子寺子屋』の企画・運営

(4) その他

・学校行事でのサポーターとしての活動
・支援物資分配作業等、必要に応じた活動

3 学生ボランティアメンバー ※別表参照・敬称略

(1) 宮城教育大学学生ボランティア（宮城教育大学学生・東北大学大学院生）

代表 木田 武宏（同学4年） 担当：宮教大キャリアサポートセンター

(2) 東北学院大学学生ボランティア

代表 東 聖史（同学大学院）担当：学院大学生課

4 活動の期間

○ 平成 23 年 5 月 1 6 日～23 年度末

5 『杉の子寺子屋』について（案）

(1) ねらい

スクールバス発車までの放課後の時間を活用し、学生ボランティアの企画・運営による学習支援の場と遊びの場を設置することにより、心と体のケアにつながる楽しい時間と居場所を子どもたちに提供する。

(2) 内容

○「学び塾」（火）（木）（金）＝原則；授業後～15:50〔家庭科室〕

各学年の家庭学習課題を含む補習・復習等、家庭学習の場としての役割を代替する学習指導を行う。

○「遊び塾」（月）（水）＝原則；授業後～15:50〔全学年校庭〕

安全に配慮しながら、自由または企画した遊びや運動を支援・監督する。

(3) 対象

全児童。

宮城教育大学教育復興支援センター 構想の必要性・背景

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県の教育の復興に向け、重点的に取り組む事項等を明確にし、県内の児童生徒の確かな学力の定着・向上及び現職教員の支援を中長期的視点に立って実施する。

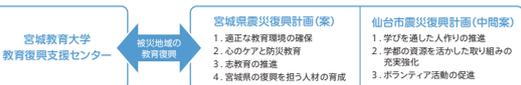
1 学力低下・学力格差への懸念

被災地の学校では、児童生徒の心的ストレスによる、中長期的な学力低下・学力格差が懸念されている。また、教員も自身が被災者であり、極度の疲労又は心的ストレス、心のケアについての知識不足も影響し、改善が課題となっている。

2 関係機関との連携による広域的支援 (ニーズに基づいたプログラム開発・人材支援)

宮城県教育委員会及び仙台市教育委員会との連携のもと、県内の国公立大学及び国立教員養成系大学・学部と連携・協働しながら、被災学校のニーズを押し、実際の支援プログラムとして学校に提供する。

3 自治体の復興施策との関係



教育復興支援ボランティア活動について 仙台市立中野小学校

宮城教育大学 木田 武宏 丹野 大輝



中野小学校の紹介

震災前



美しい干潟が近くであり、環境教育を実施するには最適な場所に立地していた。そのような自然豊かな環境の中で地域の方々と共に子どもたちは明るく元気に学校生活を送っていた。

震災直後



学校がある蒲生地区は大津波により被災し、人が住める状態ではなくなりました。また、学校が教育活動の場としての機能を果たせなくなりました。現在、近隣の中野栄小学校の校舎を一部借用して教育活動を行っている。

ボランティアをした経緯

学生の一人が理科の研修生(CST)として昨年度から中野小学校で活動していた。震災直後、少数の有志でボランティア活動を行っていたが、子どもたちの支援を充実させるため、本大学を中心に36人のボランティアチームを形成した。



教育大としての役割



活動内容

活動期間: H.23 5.16~

- 学習支援**
- 子どもたちの学習サポート
- 杉の子 寺子屋**
- 放課後、スクールバスが到着するまでの30分程度の時間を利用。
 - 家庭科室を会場に曜日毎に「学び塾」と「遊び塾」を行っている。
- 行事の補助**
- 運動会や学習発表会などの行事の補助。
 - 昨年までと変わらない環境で行えるように子どもたちの活動を支援。



今後の活動

学習支援や寺子屋の活動をより充実させていきたい。今年度だけではなく、長期間に渡って活動を続けていきたい。



活動を通して 学んだこと

将来、教師を目指す身として、子どもたちの実態をよく観察することで、教師としての使命を改めて知ることができた。また、支援を通して積極的に子どもと教師がコミュニケーションをとることが大切であると学ぶことができた。子どもたちとの触れ合いを通し、私たち自身、元氣と希望ももらっている。



宮城教育大学教育復興支援センターの機能



石巻支援学校での支援活動

宮城教育大学
藤原 結香 櫻田 翔子

被災地: 石巻市

○人口約1.6万 ○死者数: 3161 ○行方不明者数: 793
 ○避難者数: 1868 ○避難所数: 59
 ○住宅、建物被害(全壊数+半壊数): 22419 平成23年9月1日現在

状 況

- 避難所生活: 不安定、体調悪化
- 在宅: (ほとんどの重度障がい子どもたちは在宅) 水・支援物資が届かない(取りに行けない)ライフラインの崩壊(停電の恐怖!) 急激な生活環境の変化
- 慢性的な運動不足・身体機能低下(拘縮の進行、苛々感の増大、自傷、発熱) コミュニケーション環境の質的低下(不安、恐れ、寂しさ)

支 援 活 動

- 学生3~4名が1チームになって、2泊の日程で泊まり込み。10チームが入れ替わり、4月~ヶ月間入り込む。
- 食事・洗濯・清掃・布団干し・避難所にいる児童・生徒の学習支援や遊び支援・足湯手伝い・教員の業務補助・教室経営
- 支援イベント
(PTによるリラクゼーション、病弱教育教員によるお話しとリラクゼーション)
- 避難所・家庭訪問



宮城県立石巻支援学校

- やや内陸部にあつて津波の被害を免れた。
- すぐに付近の住民、および在校生が避難してきた(元々は指定避難所ではなかった)。
- 校長の英断で避難所として開放。運営の実働を教員が担うことに…。ほとんどの職員が被災者。5日間救援物資届かず。
- オムツ支援で教員と学生が石巻を訪問した際に、学校に立ち寄る。支援の要請を受ける。大学に戻り、直ちに支援チームを結成。





国立大学法人
宮城教育大学



このパンフレットは「水なし印刷」
により印刷しております。



環境にやさしい「植物油インキ」
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。

